特254
623

昭和十七年十一月

海軍記念日の回顧

東京市麹町區大手町二丁目二番地
社團法人 大日本國防義會
電話丸ノ内(23)六六〇一番

(非賣品)

始

特 254
623

目次

一、大日本國防義會設立趣意　大日本國防義會長　山田英太郎（一）
一、挨拶　海軍大將男爵　安保清種（五）
一、日露戰爭の回顧と大東亞戰爭　元イラン國駐劄特命全權公使　市河彦太郎（三七）
一、イランより歸りて
一、本會報告
一、本會定款及役員

大日本國防義會設立趣意

凡ソ國防ハ一國國命ノ繫ル所ナリ、軍備ノ事一日モ國民ノ腦裏ヲ去ルベカラズ、況ンヤ單ニ經費ノ一事ヲ以テスルモ、宇內列强皆共ニ國家歲出ノ主要部ヲ占ムルヲ例トシ、揀擇ノ當否、施設ノ得失、直ニ國家ノ生存力及ビ發展力ニ影響シ、延テ盛衰興亡ノ勢ヲ成ス、彼ノ列强ノ國、官民ノ間、各種調査研究ノ機關アリ、思ヲ國防ニ潛メ意ヲ軍備ニ致シ、精査深究倦ムヲ知ラザルモノ洵ニ以ヘアリト云フベシ。

顧ミテ看レバ、我國民ノ國防軍備ニ於ケル、留心敢テ切ナラズトセズト雖モ、惜ムラクハ意ヲ用ヰテ未ダ周到ナラズト、國防方針ノ事、國力調節ノ事ト、動員用兵ノ事、作戰計畫ノ事トヲ問ハズ、苟モ軍事ニ關スルモノハ、大小一併、擧ゲテ專門軍人ノ一手ニ放委シ、復タ多ク省ミザルノ風ナシトセズ、因習ノ然ラシムル所ト謂フト唯モ、抑亦一般軍事思想ノ未ダ發達セザルニ職由スルナシトセンヤ、開國進取ノ洪謨ヲ奉體シテ、益々國家ノ隆昌ヲ希圖スル國民ヲ以テシテ、將タ世界ノ均勢ニ伍シ、東洋ノ平和ニ任シ、地位ヤ、責任ヤ、愈々高且大ヲ加フル帝國ノ國民タルヲ以テシテ、其ノ今日ニ至ルマデ國防軍備ノ上ニ於テ、未ダ一個調査研究ノ機關ダモ之ヲ有セズト云フ、豈ニ寔ニ慨ムベキノ事態ニアラズヤ。

或ハ曰ク國防ハ軍國ノ樞機ナリ、妄ニ門外漢ノ容喙ヲ許ス可カラズト、然レドモ凡ソ軍事上機密ノ性質ヲ帶ブルモノハ、動員命令、作戰計畫等ノ數項ニ過ギズシテ、寧ロ其ノ根本義トモ言フベキ國家防衛ノ大方針、軍備ト國家經濟トノ關係、軍備ト外交トノ關係、軍備ト國力發展トノ關係、軍備ト移民拓地トノ關係、軍備ト通商貿易トノ關係、軍備ト殖産興業トノ關係、軍備ト國民教育トノ關係等ニ至ツテハ、廣ク一般有識者ノ調査研究ニ俟タザルベカラザルモノ多キニアラズヤ、之ヲ奈何ゾ軍國ノ樞機、國民ヲシテ干知セシム可カラズトセンヤ。

要之、軍備ヲ計畫シ、用兵作戰ノ事ニ任ズルハ、素ヨリ專門軍人ノ職責ニシテ、敢テ一般國民ノ干與ヲ容サズト雖モ、廣ク國家防衛ニ關スル方針施設以下、各般ノ要事ニ涉リテ調査シ、研究シ、以テ其ノ根本基礎ノ立定ニ啓沃スルハ、正ニ吾人國民ノ任務タルベキヲ信ズ、而シテ一般軍事思想ノ發達ニ裨益スルノ道、亦之ヲ措テ他ナキヲ思フ。

如上ノ趣旨ニ基キ、吾人同志相集ツテ、茲ニ大日本國防義會ヲ組織ス、冀クハ大方諸賢ノ贊同ト協力トニ依リ、此ノ事業ノ大成ヲ得ンコトヲ。

大正元年十月設立準備會ニ於テ

大日本國防義會發起人

講演

挨拶

（昭和十七年五月二十三日本會講演）

社團法人 大日本國防義會長 山田英太郎

今日は二十七日を繰上げまして、本會を開くので、乃ち今日を二十七日と心得まして御挨拶を申上げます。今日は吾等大日本神洲の國民が、これまでに考へたことのない無限の感謝と大いなる感激とを以て、第三十七回の海軍記念日を祝する洵に目出たい聖なる一日であります。海洋を制するものは世界を制する。昔には「インピンシブル・アーマダ」といふ縁起でもない外國語がありますが、此の大日本にはそんな言葉を借用してはならぬ。日本には自ら神洲無敵の海軍があり、これが傳統床しき聖戰を續行して、世界を震撼して居るのであります。此の大東亞戰爭の下に於て、今日こそは實にお初の海軍記念日であります。誰もが申しますやうに、赫々たる我が威武の宣揚。功勳の雄大壯烈なることは、何とも頌讃稱述の言葉がありません。先づ一寸考へて見ますと、第一にハワイの海戰、第二にマレー沖の海戰、第三にはスラバヤ沖、バタヴィア沖の海戰、第四にはインド洋の海戰、第五には

殆どこの緒戰の段階に於ける大段落を打つたともいつゝべき珊瑚海の海戰と算へ來れば實に屈指に遑がありません。私共のやうな年寄りには動もすれば記憶に錯誤が起きる程であります。我が無敵の海軍は、十二月八日。宣戰の大詔が渙發せられたその卽日、米國太平洋艦隊の主力を擊滅して以來幾多の海戰に大戰果を收め、今も更に雄渾豪邁なる作戰を實行しつゝあるのであります。かういふことを考へますと、ただ何となく感謝感激の外なく、歡喜感奮に堪へざる次第であるのであります。眞に世界海戰の史上、古今無比、絕倫の大業であります。これはどうも人間業ではなささうに考へられてなりませぬ。天佑神助といふ言―がありますが、全く天照らす神明に通じての、御聖業であると考へるより外に考へ方がありません。陸軍の方も同じやうな譯でありますが、その方のことは今日は差控へて申しません。

抑もこれが常日頃、默々又默々を傳統として只々實行の一途にのみ、邁進して居る我海軍の事であります。その海軍が極めてやむを得ない時に發言するのを聞けば、海洋の護りは確と請合つて居る、マア安心して居つていゝといふ位に止まるところの我が海軍がこゝに吾々の目に見せつけられた實動の實績であります。一億の國民が生を神洲に享けたる幸慶を叫び。無上の幸福に感奮、歡喜して止まざるのも、洵に尤も千萬な次第であります。思へば嗚咽感泣を催すばかりであります、

我無敵海軍はかういふ偉大な仕事をして米英を太平洋、印度洋から殆んど驅逐し去つて居るのであります、

是れしかしながら功の成るは、成るの日に成るにあらず、必ず由つて來たるところありといふやうなことが昔から申されてある通り、必ずや其原因があります。その近い原因としてはいふまでもなくイギリスやアメリカがいろ〳〵な惡謀惡計畫をたくらみまして、ワシントン條約、やロンドン條約、やの五・五・三といつたやうなことを無理に押付けまして、……否、五・五・三ならばまだしもの事。彼等米英二國が聯合すると十に對する三の實現を思はしむる無態至極の比率を日本に押付けて、我が海軍が三十七年以來、の正當なる發展を阻止せんとしたる逆效果の現れで。二十年間、所謂こゝにも貼つてあります通り、月、月、火、水、木、金、金といふ日曜土曜の休養もなしで、血のにじむやうな、否ナ幾多犧牲に滿ちたる非常な猛訓練を致しました。それのみならず、我が武器、彈藥に於ても、非常に優秀な一切の改新が行はれ夫々部局の努力によつて大いなる效を奏する譯で、その外、我が國が進んで國際聯盟を脫退し、さうして彼等が罵詈雜言する前に於て、このロンドン條約や、ワシントン條約の滿期繼續を拒絕して猛然と此等惡謀凝集の條約に、終止符を打つてしまひました事實が擧げらるゝは勿論であります。しかしながら遠因は何を申しましても日露役の海戰、就中日本海海戰に東鄕元帥によつて表現されたところのZ旗一旒、あのZの旗であつた。あの中に含んで居る意味は、とても當局のお方にでも御說明を乞うたならば、日がな一日御說明になりましても、二日御說明になりましても、盡さざる程の意味が籠つて居る。それであの旗が又今度も、ハワイの攻擊

を致します時の我が旗艦の檣頭、高く翩翻と揚げられて居つたと承知致します。この中に含んで居る傳統こそは、大伴家持の歌に現れて居る時代よりも、ずつと前の日本の肇國からやつて來て居ります意味を含んで居る。「みづく屍」といふが、今日は「空ゆけば雲に散る」とかいふ、新しい文句が附加へられた歌が出來たやうに承知致しますが、兎にも角にも日本の默々と鳴りを潜めて靜然肅然魂の用意を十分にする國體的傳統精神がずつと肇國の始まり、吾々の祖先が南洋、東海、西海の狂瀾怒濤の間に浮き沈み致して居りました頃からの、一つの傳統があるのであります。それが去ぬる三十七年前の日本海海戰に、東郷元帥によつてZ旗の上に掲げられた。この傳統こそが今日あらしめた遠因と考へます。

そこでこの遠因を持つて居る海軍記念日、第三十七回の海軍記念日の本講演會に於て、當年Z旗下の勇將の一人として砲火を潛びつゝ決戰をなされました安保清種大將閣下を煩しまして、こゝに掲げてあります通り「日露戰爭の回顧と大東亞戰爭」と題するところの御講演を、滿堂の諸君と共に拜聽するの光榮を得ましたことは、實に御同樣列席一同の欣幸ばかりではなく、洵に社團法人大日本國防義會全體の榮譽とするところであります。尙ほ差出たやうなことでありますが、折角御講演を願ひますことですから、序ながら申添へますが、安保男爵家は德川幕府の末路に於きまして、我が國の新海軍の創始に貢獻された有數のお方のお家柄であります。御先代には安保清康海軍中將閣下がありま

す。閣下は幕末の新海軍創始に貢獻せられたのみならず、實に五十年前の日清戰爭に、提督の一人として偉勳を奏されたお方であります。甚だ差出たことでありますけれども、安保家は代々我が海防の衝に當られてある先天的の因緣深きお家柄であります。以上御紹介旁々蕪辭を述べまして、御挨拶に代へます。（拍手）

講演

日露戰爭の回顧と大東亞戰爭

（昭和十七年五月二十三日本會講演）

海軍大將男爵　安保清種

今から三十七年前の今月二十七・八日を以て戰はれました日本海海戰は、これは本當に我が國の運命を懸けての一大決戰であつたのであります。日露戰爭開戰以來陸軍も海軍も連戰連勝洵に凄じい勢ひでありましたけれど、流石にロシヤは大國であつて、容易に屈服の色を示さず、何とかこの戰勢を挽回しようといふので、當時本國にあつて準備中のバルチック艦隊の精鋭を選つて東洋に派遣したの

である、當時東洋には尙ほ旅順にも浦鹽にも相當の艦隊が殘つて居る。これをバルチック艦隊と合すれば、我が日本の聯合艦隊の倍にはならぬ迄も非常な優勢なものになる。兎に角速かに東洋の海上權を恢復して、現に幾十萬の兵を滿洲の野に送つて戰爭して居る日本軍の後方連絡を斷ち切つて、玆に戰局を一變して終局の勝利を占めようといふのがロシヤの肚であつて、扨てこそ三十七年の十月十六日にリボウ軍港を出發させたのであります。ところが途中色々の出來事もあつたが翌卅八年の始めにやつとマダガスカルに――今度の戰爭にも話題に上つて居る彼のマダガスカルに着いて見ると、丁度旅順が落ちて、旅順にあるロシヤの艦隊が全滅したことがわかつたのでありますが、兎に角ロヂエストウエンスキー司令長官の率ゆるこのバルチック艦隊夫れ自身も相當の實力を持つて居るのであるからロシヤ當局は直に其艦隊の東洋進發を命令したのであつて、ロヂエストウエンスキー長官は、三月の十六日その全艦隊を擧げて、このマダガスカルを出發し日本の方に向つたのであります。萬一にも支那海日本海方面の海上權がこの露國艦隊の手に握られることになれば、實際在滿洲幾十萬の我が野戰軍はその後方連絡の大動脈を切斷せらるゝのみならず我が日本の本土自身が如何に成り行くか誠に我國に取りては容易ならぬ危機に直面した譯なのであつて、このロヂエストウエンスキー艦隊がマダガスカルを出發したといふ報知を得てからの我が國朝野の心配は、それはもう非常なものであつたのであります。隨つてこのロヂエストウエンスキー艦隊を迎へ擊とうと云ふ我が聯合艦隊の職責といふものは極めて重大なものがあつたのであります。

さて愈〻二十七日の朝であります。早朝信濃丸から敵艦隊見ゆとの警報に接した我が聯合艦隊は實際非常な決心を以て卽時鎭海灣を出動致し道々敵に對する合戰の準備を整へながら朝鮮海峽の東水道に向つて參りました、午後一時四十分には敵艦隊を遙か南の方に發見し愈〻戰鬪行動に移つたのであります。聽て「皇國の興敗此一戰に在り、各員一層奮勵努力せよ」の信號が、旗艦三笠の檣頭に飜つたのであります。この時に於ける東鄕長官はと申しますと、頸から掛けられた大きな双眼鏡を右手に持つて胸の邊りに置き左手には長劒の柄を確かと握り締め三笠の最上艦橋の左側の方に立たれまして口を一文字に結んで悠揚迫らぬ落着の裡に何とも云ひ知れぬ一種の緊張味を以てぢつと敵の方を睨んで居られる、その眼指しには必勝の信念が躍如として輝き例の如くその頰をふくらまして居られ如何にも決意の程が窺はれるのでありました、蓋し東鄕さんはふだんから何か艦を扱ふ樣な時でも、一つかうしようと決意をされた時にはブーツト頰をふくらますのが一つの癖でありました、參謀長の加藤友三郎少將、後に海軍大臣、總理大臣になられた加藤さんは平素よりも一層沈著で、その蒼白い心配そうな顏の中に又何ともいひ知れぬ喜びの色を浮べて居る。夫れといふのも、ロヂエスト艦隊がマダガスカルから來て滯在して居つた佛印のカムラン灣を出發したのが五月十五日でありますが、それから十日も經つけれども、どちらに行つたのやら杳としてその消息が分らない。敵は遠廻はりをして

津輕海峽からウラヂオストックへ行くのか、或は朝鮮海峽に出て來るのか皆目分らない。隨つて我が聯合艦隊はこの朝鮮海峽で敵を待つべきか、津輕海峽に回航すべきかといふことに付て、東郷さんを初め幕僚一同この一兩日は心配の絶頂にあつたのでありますが、さて愈〻敵がこの朝鮮海峽に現れたといふことであれば、こゝで決戰が出來る。まあこれ程結構な有難いことはないのでありますから、參謀長の喜色滿面も無理はないのであります。中にも秋山參謀の如きは敵艦が見えたと云ふので占めた々々と三笠の後甲板で小踊りされた程であつたが秋山參謀には豫てから有名な禪論と云ふのがあつた、卽ち禪といふ字は衣扁に軍と書き昔の人は戰さの時に固く腹帶を締めて臍下丹田にぐつと力を入れて、死ぬか生きるかの巷に無限の力を發揮するのであつて日本人の禪は夫れから生れて來たのである、今日は本當の戰さだから腹帶が大切だと云はれて、わざと劍のバンドを軍服の上衣の上からぎゆうと締めて日本海海戰に臨まれたのである、處が日露戰爭が濟んだ後に東城畫伯が日本海海戰の三笠艦橋の繪を描かれる際には流石に秋山君も色氣があつて、繪の上では服裝は正式に描いてくれと特に注文せられ現在のあの三笠艦橋の圖にはちやんと上衣の下に劍のバンドを締めて居られるのであります。

愈〻敵も目捷に迫つて、こゝで敵前に於ける艦隊の大角度の正面變換が決行致されたのでありますが、その刹那に於ける三笠艦橋の光景は洵に何とも形容の出來ない一場の歷史劇的場面であつたので

あります、當日は波もなか〳〵高く、風も强く吹ており海上は一面の薄霧である、その薄霧の中を透して見ると、無慮三十八隻一團となつたロシヤ艦隊が威風堂々二列縱陣の構へを以て我れに向つて突進をして來るのであります。この刻一刻と迫る大敵を眼前間近に迎へ、今日はどういふやうにこれと戰さをしようかといふことを決定する、眞に危機一髮の瞬間であります。私は當時少佐でその三笠の砲術長としてこの艦橋にあつたのでありますが、申上げるまでもなく、砲術長はその艦の射擊を司る役目であつて、今日と違つて射擊の用具や設備等も甚だ調つて居らぬのでありますから、それで砲術長がその當日の敵の向き、風の方向、風の力、又自分の方の艦の向きや、大砲の向き等、いろ〳〵それを綜合して、この位な照尺を調へれば、敵に彈が當るといふその射擊諸元の分量を決定して、それを砲臺に號令をかけて、それから初めて擊ち出すのでありますから、今日の戰さは敵と相並んで戰さをするのか、敵と擦れちがつて戰さをするのか、又右の側で戰さをするのか、左の側で戰さをするのかといふことが決まらないと最初の號令を砲臺にかけることが出來ない。そこで私はどう云ふ風に戰さをされるのかと至大の注意を以て、この三笠艦橋の一擧一動に注意して居つたのでありまするが、東郷さんは前年の八月十日の海戰で苦い經驗を持つて居られるので、戰さはどうしても七千メートル以内に入らなければ射擊の效果を上げることが出來ないといつて居られた關係もあり、今日はきつと接戰をやられるに違ひないと考へて居つたのでありまするが、當日は靄が掛けて居つて、敵の影も薄く見え

た關係もあり彼我艦隊の近接も意外に早く三笠の艦橋で敵を量つて居る測距儀、それが八千五百メートルを報告したのであります。私は職掌柄氣が氣でないので、「最早八千五百であります。」と大きな聲で呶鳴つたのであります、さうすると加藤參謀長が私の方を向いて「砲術長—君、一つスウォロフを量つてくれたまへ」と云はれたので、距離測定掛りの長谷川少尉—今日の臺灣總督—長谷川大將であります。—に代つて、私が測距儀に付て先頭に進んで居るロヂエストウエンスキーの旗艦スウォロフを測つて見ると正に八千メートルになつて居るではありませんか、そこで私は「スウォロフ八千」どちらの舷で戰さをなさるのですか」と非常に大きな聲で呶鳴りますと。この時早くかの時遲くと申しますか、その途端に東郷長官の右手かサッと左に圓を描かれ、加藤參謀長と何事か頷かれたと見えたその刹那に加藤參謀長の例のかん高い聲が突如として響いた。「艦長取り舵一ばい」取り舵一ばいといふのは、大きな舵を取つて左の方に艦の頭を急轉することである。そこで旗艦三笠は非常な勢ひを以て頭を左の方に曲げて、東に向つて斜に敵の先頭を壓したのであります。これが所謂日本海海戰の敵前に於ける艦隊正面變換の實際でありまして、東郷長官が今日は是が非でも敵に勝たねばならぬといふ堅い〳〵決心の下に、思切つて斷行された一つの戰術運動であつたのであります。三笠がぐるりと廻つて新正面に就くと敵艦隊は早くも砲火を開いたが、我は滿を持して應せず六千四百メートルに至つて、私は敵の旗艦クニャージ、スローロフに對し一齊射擊を開始したのであります。三笠に續いて、敷島、朝日、富士、日進、春日が次々と新しい正面に入つて砲火を開きこゝに日本海海戰の幕が切つて落された次第で、時正に二時十分でありました。（こゝで海戰圖を說明す）兎に角合戰の立ち上りに於て先頭に立つて敵方に突入して行つた旗艦三笠は自然敵の集中砲火を被り大小の砲彈は頻々として彼所此所に命中し、後檣は折れ、ヤード即ち帆桁は飛び、艦橋や砲臺などにも損害續出し東郷長官の身邊數吋の所に敵三十糎砲彈の破片が飛込み來るなど實際かなりの危機に立つたのであるが、その苦戰を覺悟の上で斷行致されたこの東郷さんの思ひ切つた戰術運動が、砲戰距離の短縮とともにだん〳〵と效果が現れて參り、こちらの彈も盛に命中を始め、午後二時半頃は敵も味方も正にその全力を盡しての必死の決戰で、戰ひ最も猛烈を極めたのであつて流石の敵陣も漸くそこに混亂を生じ、敵の第二の旗艦オスラビヤが先づ最先きに擊破せられて一方に傾き、正に沈歿せんとして居り、又ロヂエストウエンスキーの旗艦スウォロフも大破を蒙つて、帆柱は折れ、煙突は飛び、全艦火焰に包まれて進退の自由を失ふといふ有樣、而して、我が艦隊から矢繼ぎ早に擊ち出す砲彈は命中につぐに命中といふ次第でありまして、その命中した彈の炸裂した煙と火災の黑い煙、それに當日の濛氣と相俟つて殆ど敵の艦體が見えなくなり、煙突が見えなくなる。終ひにはマストも見えなくなるといふ有樣で、己むを得ず我が艦隊は一時射擊を中止することになつたのでありますが、これが戰鬪開始から僅かに三十分後のことであつて、日本海海戰勝敗の大局は實にこの間に決定を致したのであります。

さてこの二十七日の晝の合戰は敵味方全力を上げての激戰實に、五時間餘に亙つたのでありますが、流石頑强に抵抗した敵艦隊を散々に擊破し、司令長官の旗艦スウォロフを初め、敵艦七隻を擊沈致し丁度日の沒せんとする午後七時半、ボロヂノといふ戰艦を擊沈したのを最後として、我が旗艦以下の戰艦及び巡洋艦の各隊は、戰場を驅逐艦、水雷艇に讓つて北上、何れも翌日の集合點と豫定された鬱陵島の南に向つて急いだのであります。そこで戰さは夜戰といふことになつて、我が驅逐艦、水雷艇四十餘隻は北の方、東の方、南の方と、三方から敵を圍むやうにして肉迫、襲擊を決行し、晝の戰さに疲勞困憊して居る敵を夜もすがら駈け惱まして、遂に敵艦四隻を擊沈致したのであります。明くれば二十八日の鬱陵島南方に於ける晝の戰さであります。これは又前日とは打つてかはつて天氣もよし、展望も所謂百パーセントで、追擊戰にはもつて來いの戰さ日和、日本海のかしこにも、こゝにも、忽ち猛烈なる總追擊戰が開始せられたのであります。この日の戰場は廣さ二百浬に亙り大小の合戰無慮八場面に及んだのであつて此處で更に敵艦七隻を擊沈し、五隻を捕獲して、ロヂエストウエンスキー司令長官、及びネボガトフ司令官以下將兵六千を捕虜と致し、絶大の收獲を以てこの日本海海戰の幕を閉じたのであります。

かやうにして日本海海戰に於て、一擧にして敵艦隊を全滅したのでありますが、この海戰で我が聯合艦隊の一同は、全く必勝の信念を以て戰つた。是非とも勝たなければならぬといふので戰ひに臨んだのに反して、ロシヤの方はなるべく決戰を避けるのを建前として戰さに臨んだ、こゝに兩軍の信念の相違があり、これが又勝敗の岐れるところであつたのであります。御承知の通り、東郷さんは鎭海灣出動に際して「敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直ちに出動、敵を擊滅せむとす」即ちまだ敵を見ない中にこの敵は擊滅するのだといふことを最も明白に、最も大膽にこの擊滅の二字を以てその鐵の如き所信を斷言して、所謂未だ戰はざるに敵を呑んで居るのであります。それから艦隊に對する訓辭に於ても、既に合戰となつたらもう防禦のことをいふ必要なし、積極的の攻擊は最上防禦である。日本の優勢なる射擊を以て敵を壓倒せよ。かういふ風にいつて居られる。一方敵のロヂエストウエンスキー長官の方は、なるべく決戰を避けて、最少の損害を以て、先づウラジオに到達し後圖を策すると云ふが大體觀念であつて、從つてその作戰命令に於ても、合戰の間に旗艦が損傷した場合には、二番目の艦が先頭に立つて艦隊を指揮しろ。又旗艦が傷んだ時分には、司令長官は外の艦に乘り移るから、驅逐艦は旗艦の傍に集れといふやうな、自分の方の敗けることを建前として作戰命令が出來て居る。又愈〻擊ち合ひが始まりましてからの兩軍主將のなされ方を見ても、東郷さんは一同のたつての勸めにも拘らず、俺はもう老人であるからお前達若い者は這入れ。將來の御奉公が大事だといふやうなことをいはれて司令塔の中に這入られない。さうして眞先に進んで行く三笠の全く防禦のない最上艦橋に立つて親しく艦隊を指揮せられ身自から決死の覺悟を全軍に示されたのであります

が、ロシヤの方のロヂエスト司令長官は、第一日の戰ひにその旗艦スウオロフが大損傷を蒙るといふと直に驅逐艦ブイスイを呼んでこれに乘移り、さうして自分の率ゐる艦隊を置き去りにし、合戰最中の戰場を見捨てゝ、獨りウラジオ指して遁走を急いだのである。而もその驅逐艦の艦長に對しロヂエスト長官が親から「お前の艦には白旗があるか」降參をする時の用意の白旗があるかといふことを問うたといふに至りましては、如何に國民性が違ふとは云ひながら、洵に情ない感じが致されるのであります。主將の心は麾下全軍の心であつて、我が聯合艦隊の將兵は、一死報國、是非ともこの戰さに勝たなければならぬといふ、必勝決死の信念に燃えて居つたのに反して、ロシヤの方の將兵は、一體吾々は何の爲に日本と戰さをしておるのか、又今度の東洋派遣も日本と決戰をしなければならないのか、或は單にウラジオストック迄行けばそれでいゝのか、何んにも分らず唯だ無意識で戰さに臨んだといふやうな次第であつて、戰ひに最も大切な犧牲心や、積極的意氣込みなど全く見るべくもなかつたのであつて、こゝが即ちロシヤが日本海で大敗をした所以であるのであります。

實際その國の國民性とか、又その國の昔からの傳統的精神といふやうなものが、いよ〳〵といふ場合には偉大な力となつて現はれて來るものでありまして、なんといつても戰爭にはこの傳統的精神程大切なものはないのであります。現在の大東亞戰にこれを見ましても、皇軍將兵の行くところ、躍如としてこの傳統的精神の横溢することが認められるのであり、殊に最近發表になりましたあのハワイ

に於ける特別攻撃隊の九勇士の如き、これを新聞記事に見ましても、「選ばれて單身敵港灣に突入、民族の福祉と世界平和招來の大任を果さん」と決意し、「身はたとへ異境の波にはつるとも護らでやまじ大和皇國を」と詠ぜられ、或は又「君のため何か惜まん若櫻、散つて甲斐ある命なりせば」と歌ひ、「いざ行かむ網も機雷も乘り越えて」云々といふやうな意氣込みを傳へて居り、更に又「國家のため、帝國發展のために小我を捨てゝ大我に生きるのみであります」と今死にに行く二十二歳の若い身で母親に書き遺すなど、まことに涙なくては讀むことの出來ない熱誠崇高なる遺書であつて、いづれも御國の勝利を得るがために、自分の身を犧牲にしてそれだけの仕事をなし遂げた上に從容として死につかれたのである。

ところが敵の方は今度の戰爭に於てもやはりこの戰に對する觀念といふものが全く吾々とは反對であつて、成べく血戰を避けて自分の方の損害を被らない範圍に於て敵に打擊を與へようと、かういふ義務的、打算的戰法に終始して居るやうに見える。イギリスの總司令官のウエーヴエル大將の如きシンガポール迄乘込み來つたが、シンガポール危しと見れば直に脱出してジャワに逃れ、又ジャワも安心が出來ないとなれば忽ちインドに飛んで、あとは野となれ山となれといふわけでもないでせうが、一向關心を持たないかのやうに見える、又フイリツピンに於ての米國總司令官のマックアーサー大將の如き、平素の廣言にも似ず、その身が危しと見れば忽ちその根據のフイリツピンを捨てゝコソ〳〵

と濠洲の方に夜逃げをして平然たりといふやうな始末で、苟くも主將ともあるものが自分を犧牲にして大局を制するといふやうな點については何等考慮するところがなく、唯身を完うするにこれ急といふやうな實情でありましては、幾萬の部下が死を賭して敵に當るといふやうな氣概を示し得ないのも無理がないのであります。更に又香港戰に於けるヤング總督の如き、部下に一萬二千の精兵を有して居ながら急いで白旗を上げて降參する。又シンガポール戰に於けるパーシバル將軍は無慮七萬幾千といふ大軍を擁して居りながら「刀折れ矢盡きた」というて忽ち白旗を靡す、又オランダのチャルダ總督がジャワ交戰僅か九日にして逸早く全面的無條件降伏を申し出た如き、さうして又今度のフィリッピン全米國軍の司令官であるウエーンライト中將、これも我が決死隊に蹈み込まれてコレヒドール要塞に於て忽ち白旗を立てたといふやうな風に、要するに彼等は水道が斷たれたとか、糧食がもう缺乏したとか、兵器彈藥がなくなつて來たとか、援兵が來着しないとかといふやうな適當な口實が備はれば、待つて居ましたとばかりに降伏の白旗を上げるのであつて、必ずしも日本海海戰に於けるロヂエスト長官の遁走や降伏のみを咎める譯には行かない樣に思はれます。兎に角彼等は戰爭といへばなによりも先に降參するといふことを考慮するので、この邊が全く吾々とその信念を異にして居るのであり、こゝが又この戰爭に於ける勝敗の岐れる所以であつて、世界に比類のない我が國體の有難さといふものが今更のやうにしみ〴〵と痛感致されるのであります。

しかしながら精神方面だけでは勿論戰に勝つわけにはいかない、そこにはどうしても兵力の準備といふものが大切であるのであります。我が國民は日清戰爭の當時幾萬の血を流して得た遼東半島、それをロシヤ、フランス、ドイツの所謂三國干涉のために再びこれを支那に還してしまつたのであります、この横暴不當な三國干涉には當時の我が國民は眞に遺恨骨髓に徹して、爾來十年といふものは全く一劍を磨いての臥薪嘗膽、今に見ろといふ全國民一致の眞劍振りで、汗しづくになつて一日働いた。大の男が當然口にすべき三度の食事も二度に減らし、扨ては婦人の命ともいふべき白粉、口紅、髮結錢の資までも節約して勤儉努力の貧乏世帶に我慢をしながら、一方に於ては身分不相應ともいふべき立派な而も釣合ひの取れた最新式艦隊を準備されたのであつて、我が國民の一念の籠つたこの艦隊の全能を東鄕さんが練りに練つて日本海海戰に活用發揮したといふことが、當日の偉大な戰勝を得た原因の一つであるのでありまして、この平常から量と質とを兼ねた十分な軍備を豫め用意するといふことが戰爭に勝つ最も大切な要點であるのであります。實際日本海海戰に於て戰場に活躍した日本の艦隊の噸數は二十一萬八千噸あつたのに對して、ロシヤの方は十五萬噸餘に過ぎない、所謂日本の六九%、六割九分位ほかなかつたのみならず、質に於ても東鄕さんの旗艦である三笠、又上村長官の旗艦の出雲の如きはその當時の世界の海軍の最優秀の艦といはれたものであつて、質に於ても頗る優つて居つたのであります。

更に日清戰爭に就て之を見ましても、黃海々戰の如き正に我が國獨特の軍備と特殊の戰法を以て大勝を博した次第でありまして、今其の大要を申上げますと、當時支那の北洋艦隊といへば、鎭遠、定遠といふやうな世界的に有名な甲鐵艦を揃へて居り威風堂々飛ぶ鳥を落す樣な非常な勢ひで、屢々日本にも顏を出して我國朝野を驚かしたこともあります。當時の日本の海軍としては相當の準備もし、又粒選りの最新巡洋艦等も揃へて相當實力を持つて居つたのでありますが、北洋艦隊に比べますと正面からは一寸太刀打ちが出來ないのであつて、實のところ我が國にも甲鐵艦の一、二艘は欲しいのでありますけれども、財政の關係やなんかでさうは行かない、そこは日本は日本の考へといふ意味に於て定遠、鎭遠の厚い十四インチの甲鐵を貫くことの出來る三十二サンチといふ大きな大砲をたつた一門持つた四千二百噸の松島、嚴島、橋立の三景艦を造つたのであつて、之れがあれば先づ一と戰出來ると、云つたやうな意氣込みを以て日清戰爭に臨んだのであります。私は幸に當時少尉でこの三景艦の嚴島に乘艦出征を致したのでありますが、さていよ〳〵黃海の海戰になると、なんといつても敵は甲鐵艦揃ひで、大砲も巨砲を多數裝備しており、而もそれを率ゐるのは當時の名提督と謳はれた丁汝昌でありますから、その全艦隊を橫陣に構へ驀らに我が艦隊の中央を目掛けて突進をして參つたのであります。之に對し我が艦隊は縱陣を以て二隊に分れて敵の右翼に迫つたのであります。先鋒隊は吉野、秋津洲（艦長上村彥之丞後の大將）高千穗、浪速（隊長東鄕平八郎後の元帥）の四隻で司令官坪井航三少將之を率ゐ本隊の方は松島が旗艦で、伊東祐亨中將が司令長官、それから次は千代田、三番目が私の乘艦をして居つた嚴島、その次が橋立、比叡、扶桑と、かういふ順序でありますが、この比叡といふのは木造艦で、走るには帆前と蒸汽とを兼ね私共少尉候補生の遠洋航海の時は主として帆で走つたのでありますが、所謂簪艦といつて三本帆檣の舊式艦でありますから、無論本隊などに加はつて戰ふことは實際無理なんであつて。果して戰が始まると速力が遲いので、かういふやうに（海戰圖を示めす）比叡と前續艦の橋立との間が千三百メートルも離れてしまつたのである、そこで丁汝昌は機乘ずべしと云ふので定遠、鎭遠を中堅としてこの間に楔を打込む樣に突進して來たわけでありまして、弱小な比叡は絕體絕命鷹に攫まれた雀のやうに今一當で衝き沈められると云ふ眞に危機一發に迫つたのでありますが、櫻井規矩之左右艦長は、敵を避けると思ひきや、いきなり面舵一杯を取つて大膽にも來遠と定遠との間に艦首を突込んでしまつた、敵は比叡がこの間に飛込んで味方の中にまぎれ込んで來たから、うつかりすると、味方擊ちをするので攻擊も出來ず敵の陣形は忽ち混亂が起つたのであります、兎に角この比叡は來遠と殆んど舷々相摩しての擦れ違ひで互に乘移れる程接近したので來遠の方では、比叡を乘つ取る意味ではないが、甲板に襲擊隊を呼集した、この襲擊隊呼びと云ふのは、敵艦に乘り入つたり、或は乘つ取りに來る敵を防ぐために、豫め槍だの斧だの拳銃だの夫れ夫れ武器を持つて艦の舷側に勢揃ひをすることであつてその當時は我艦隊にも無論その仕組があつたので

ありますが、その來遠の甲板に列んだ襲撃隊を比叡は檣樓に備へた機關砲で片つ端から一人殘らず薙ぎ倒してしまつたといふ實に眼にも止らない活劇がこゝに演ぜられたのであります。

この比叡は木艦でありますが、敵と衝突でもした場合のことを考慮し碇泊中に軍艦の兩舷から張出すスウキングブームといふて棒――此棒から下げた網だの網梯子などに碇泊中ボートだの小蒸汽だのを繋ぐのである――このスウキングブームの棒の先に爆藥を結びつけ、爆藥から電線を艦橋に導き敵と衝突した場合にその棒を張出して敵の艦底に棒先を突込み艦橋のスイッチを押して敵の横腹にドント大穴を明けようといふのである、僅か二千噸足らずの貧弱な木艦比叡ではあるが、いざ合戰となれば當時最强最鋭を謳はれた定遠、鎮遠の舷側に乘り付けてその横つ腹をと狙つたものである、所謂敵と刺し違ひの體當りをしてやらうと云ふ譯であつて、以て當時に於ける我が艦隊の意氣込みも窺はれるのであります。兎に角この日の海戰に於ては我艦隊はその優速を利用し運動自在の縱陣を以て敵の一翼を包圍する樣にし主として集中攻擊を加へたのであるが、この速射砲といふのはイギリスで發明され、無煙火藥の發明と共に、明治二十三年に英國海軍に始めて採用されたもので、それから越へて僅か四年後の明治二十七年のこの黃海の海戰に我が艦隊の大部分が十五サンチ、十二サンチの速射砲を持つて居つて、敵に面を向けられぬ程に速射して目潰しを喰はせ、それがこの海戰大勝利の一つの原因になつて居るといふことは、如何に我が海軍がその當時に於ても最新式のものを取入れて之をこなして自分の軍備として整備を致して居つたかといふことが分るのであります。

由來我が海軍はこの筆法で軍備をやつて居りますので、軍備の費用はイギリス、アメリカあたりから比べれば極めて少額ではありましたけれども、所謂獨特の工夫と特殊のお膳立てを整へて、イギリス、アメリカに對して一歩も讓らないといふ覺悟を以て海軍軍備の準備を致し來つたのであります。

が、二十年飛ばず、鳴かずの準備が今度の大東亞戰爭に御承知の通りの形となつて現はれ來つたのであります。一體戰爭にはどうしても勝たなければならぬ、戰爭に勝つ戰法としては敵の意表に出て機先を制するといふことが肝腎であつて、敵の意外とする兵器を應用して、想ひも寄らぬ攻擊法を案出して敵の虛に乘じて奇襲をやり、强襲をやる、さうして敵を見つけたらこれを逃さずに擊滅するといふのが戰の要諦であつて、この擊滅にはどうしても決戰を以て行かなければならぬ。決戰をするには自然近戰、敵に近づいて接戰をしなければいけない、かういふ樣な要領で今日もやつて居るわけであります。先づこの奇襲を加へるといふことは、これは日本人の――日本人は元來昔から元龜、天正といへばもうすぐ戰國時代を聯想するやうに昔から戰といふものは上手である、彼の信長の桶狹間といつたやうに敵の意表に出て奇襲をすることが戰勝を得る所以であつて、日淸戰爭に於きましても、當時和戰の形勢は未だ確然と決つて居らない時に、豐島沖で支那の陸軍を輸送して居る艦隊と日本の艦隊と遭遇して、こゝに豐島の海戰が起つたのであつて遂に敵の巡洋艦廣乙等を擊滅し、砲艦操江を捕

獲して、支那兵滿載の高陞號をイギリスの旗が揚つて居るにも拘らず東郷さんが撃沈し、濟遠に打撃を與へたこれが一つの緒口となつて間もなく宣戰の詔勅も下り、日清戰爭と相成つた。日露戰爭に於ても形勢頗る逼迫したあの三十七年の二月の六日に聯合艦隊は佐世保を出港して、さうしてその八日に仁川沖で敵の六千噸巡洋艦のワリャーク、これは後に日本の宗谷となつた、そのワリャークと砲艦コレーツをやつつけ、さうして同じ八日の晩には旅順口の沖に竝んで居つた敵の主力艦隊に對して我が驅逐艦が夜襲をして敵の戰鬪艦レトウキザン、ツエザレウイッチの如きに大損傷を與へ一つは港口に座礁し一つは十八度も傾いて將に沈沒せんとして辛うじて助かつた位であつた。それから六千噸巡洋艦バルラーダに魚雷を命中せしめ、さうして翌朝天明と共に我が東郷さんが主力を以て敵を攻撃して更に損害を與へた、かういふのであつて、兎に角奇襲を企てた、その八日の晩といふのはロシヤでは二月の十六日に當る、聖母のサン・マリヤの誕生日かなにかの日で、ロシヤでは所謂大祭日で、その晩は踊り明かし、飲み明かすと、かういふ日なのであります。その踊り明かし、飲み明かしの晩にこちらの驅逐艦が夜襲を仕掛けたのでありますから、丁度今度のハワイ沖に於て土曜、日曜で休暇といふことを無上の權利にして居るそのアメリカ艦隊の不意に乘じて爆撃や特別攻撃をやつたのと、この邊は自ら揆を一にして居るのであります。兎に角立上りにうんと一つ拳固をかまして向ふの體勢を崩すといふことは戰爭に於て極めて大切な事で相撲の立上り如何が勝敗に大關係を有するのと全く同じ樣なわけであります。

さういふわけで、今度の大東亞戰に於きましても、初めイギリス、アメリカなどは日本が立上つたところでこちらはA、B、C、Dといふ手を繋いだ立派な鎖があるので、經濟壓迫で三ヶ月内で必ず日本を屈服させる、必ず屈服して見せると豪語して居つたのでありますが、さていよ〳〵戰といふことになると日本は忽ち敵の意表に出でハワイに於ての一撃となり、先づ米國の鼻柱を挫き續いてマレー沖のイギリスの主力艦撃沈とかうなつたのでありますが、我國は特殊の兵器、艦艇、航空機を以て獨得の體當り戰法を實施するなど我が傳統を發揮して夫れから夫れと大效果を擧げたのである、而して作戰の當初より海陸の制空權を我手に納めた我軍は忽ち香港を攻略し、シンガポールを占領し、又蘭領印度からフイリッピン全島の降伏となり、更に西南太平洋に於ては米英蘭の聯合艦隊を撃滅し、遂に我手は印度洋に伸びてセイロン島のコロンボやトリンコマリーの攻撃、それから甲級巡洋艦や航空母艦ハーミスの撃沈と共にベンガル灣の制壓となり同時に陸上に於てはビルマのラングーン續いてマンダレーの占領を決行し愈〻援蔣ルートの絶對遮斷となり、それからインドに對する攻撃態勢も茲に完整した次第で、更に南方に於ては米英蘭の有力なる聯合艦隊を珊瑚海に撃滅して世界を驚倒せしめ、益々濠洲を絶望の淵に陷れ蔣介石を孤立無援の窮地に立ち至らしめたわけであります。アメリカ、イギリスも今は明かに自分の國の敗戰を認めては居るのでありますが、その眞相を發表すると

民論の囂々が畏いから唯だひた隠しにこれを隠して居るといふのが實情である、而かも今日の英國は最早獨り立ちは出來ず、一にも二にも米國に賴るの外ないのであり、今後の作戰指導は主としてルーズベルトの双肩に懸つて居るのであつて、ルーズベルトとしては最後の策としてアメリカの資源、生産力の利用擴充を圖り持久戰を以て相手の資源を消耗せしめ之を壓倒するのだと云つて、日本に對してしきりに一九四四年の反擊といふことを高唱し國民や内外に對する申譯として自から慰めて居るのである、ハワイやマレー沖海戰以來あまりにも手痛い敗戰に聯合國に對する威信失墜して、國内の輿論もいよ／＼沸騰して參つたので、政府當局も全く頭痛鉢卷の體であり、更に最近には軍需品生産計畫も停滯をする有樣で、夫れにストライキ人員も急遽に增加の傾向にあり、物資不足とインフレの昂進のために民衆生活の壓迫といふものが益々これに拍車をかけ容易ならぬ狀態に進みつゝあるのであります。申すまでもなくアメリカは輿論の國であつて、輿論の國の弱點といふのは誤れる輿論が所謂政治を動かし、軍略を左右し、遂にはそれが一國の運命に關係を持つことになるのであります。其點は英國も同樣であつて首相チャーチルもこの前の大戰に海軍大臣として、ベルギーにドイツが攻め入つた時分にアントワープを守備するとて英國より海軍の陸戰隊をアントワープに出兵し、ドイツの大軍から圍まれてひどい目に遭つたし、更に今一つは軍令部長のフキッシャー元帥の不同意を押切つてガリポリ半島に出兵しトルコの爲に陸兵も海軍力も大きい部隊が隨分手ひどい大損害を受けて敗退

したといふ大失策がある。さういふやうな失敗があるにも拘らず今度も亦プリンス・オブ・ウエルス及レパルスの如き新戰艦をアメリカの尻馬に乘つて日本を威嚇する爲め大急ぎで東洋に派遣して、日米が國交斷絶すれば英國も一時間以内に日英の國交を斷絶するのだと廣言して潛に得意になつて居つたが、焉んぞ知らん、その政略的行動のプリンス・オブ・ウエルス、レパルス二戰艦は日本の海鷲にかゝつて一たまりもなく沈沒して世界の物笑ひとなり名實共に英國に取返しの付かぬ大損害を來したと云ふのでイギリスの上院では、チャット・フイルド海軍元帥が盛んにチャーチル首相に喰つて掛り政略のためにあの大事な艦を東洋に送つてむざ／＼沈沒させ英國海軍の傳統を滅却してしまつたその責任はどうするのだと鋭く詰め寄つたのも當然な話である、そのマレー沖海戰の非常な手痛い教訓にも懲りずに又この今月の初めに珊瑚海では米國も英國も大きな戰鬪艦だの、航空母艦などを持つて來て、さうしてそれを殆んど全滅させられて居るのである、やはりこれはルーズヴエルトあたりが戰略に喙を出した結果の失敗と思はれるので、輿論に動かされるといふよりか、今日はルーズヴエルトも、チャーチルも自分の自慢れから來る野心の現はれとして、かういふことが戰の場面にもちら／＼と出て來るのであつて、かういふことが自然自分の國を亡ぼすことに立ち至るのであつて敵ながらむしろ憐然に堪えない次第であります。

それでこの敗戰をどうかして取戻さなければいけないといふのがルーズヴエルトの敗戰對策で、ア

メリカの議會では一九四〇年、即ち一昨年の六月以來既に六百八十億ドルの國防費の支出を承認して居る、これは今年の六月までの國防費でありますが、更にルーズヴェルトは今年の初めの議會の教書に、この七月から向ふ一ヶ年の間の軍事費として八百八十億ドルの支出を要求して、さうしてこれで以て從來の海軍擴張案の外に本年の内に飛行機六萬臺と戰車四萬五千、高射砲二萬、船舶八百萬噸を急造する、又明年の夏までには飛行機の年產十二萬五千臺、即ち月に一萬臺づゝ造る、戰車七萬五千、高射砲三萬五千、船が一千五百萬噸を增產するといふのが議會に送つた教書であります。これはその當時新聞でも論評されたのでありますが、昨年末の飛行機の生產高は月產二千機がやつと出來る位で、今年の夏でも恐らく月產三千は超すまいと思ふ、それを一萬近くも月に造らうといふのが計畫である。それから船の方に致しましても、やつと六十八萬噸が昨年中に出來た新造船であつて、いくら急いでも年に八百萬噸、次の年には千五百萬噸造るといふやうなことは殆んど不可能に等しい、しかし夫れは兎に角として彼等の實際に欲するところは第一に戰艦を早く造り上げることである、日本に優る戰艦勢力を拵へて、一日も早く日本に復讐しなければならん、日本に對する攻擊に轉じなければならんといふのでありますが、今日の物資不足やストライキの簇出ではなか〳〵希望通りに戰艦は竣工しない、實際ゴムの如き今月の初めにアメリカの物價統制局長官ヘンダーソン、これが上院の委員會で說明した中にも、「アメリカのゴムの輸入の九八%は西南太洋からであり、それは今日本が占

領して居るので、そこからは全くゴムが入らない。それで人造ゴムその他貯藏して居つたもので兎に角今年は間に合はせるが、來年はイギリス、アメリカを合せてどうしても百五萬噸のゴムが要るのに對して、いろ〳〵なものを買集めても四十六萬八千噸不足する、そこでどうしても人造ゴムをうんと造らなければならん、明年は三十萬噸、明後年は六十萬噸の人造ゴムを製造しなければならん」といふことを委員會に言明して居る。又平常あり餘る程鐵もあるといはれて居つた米國が今日は、鐵が非常な大節約を必要とするのであつて、今月の四日に出た政府からの命令に依り米國民の最も嗜好品であるラヂオ、婦人の髮に必要なヘヤピン、日常無くてならぬ萬年筆の製造迄も禁止するといふのが實狀である。

軍艦急造の困難は實に察するに餘りあるのであるが、假に一歩を讓つてこの戰艦が工合よく豫定の通り竣工するとしても、それに乘る人を集めるといふことがこれ亦鐵を集めるよりも更に困難である、本年度の海軍人員は二十八萬六千人の豫定であるが、果して人が集まるか否か疑問である、更に四十五年、即ち昭和二十年には四十七萬三千人の人を海軍に入れなければ艦が動かない、とてもそれだけの人を造らうといふことは今日の狀態ではむづかしいのであります。そこで更に大いに讓つてこの乘員が揃つたと致しましても、今度はそれを訓練するといふことが、これはなか〳〵半年や一年で實際の役に立つものではない、海軍の兵員といふものは御承知の通り志願兵を主として居るやうなも

ので、長く海軍に居る者でなければなか〳〵軍艦の乘員として務まるものではない。前大戰の時分に私は英國大艦隊のビーチー長官の艦隊に從軍して居つたのでありますが、ドッガーバンクの海戰にビーチー長官旗艦ライオンの次にタイガーといふ當時出來たばかりの最新最鋭の巡洋戰艦を配したのであるが、扨て合戰が始まつて見ると期待に反してこの二番艦のタイガーの砲彈は一つも敵に中らない、彈の中らない戰艦といふものは全く戰艦ではない、この戰が濟んだ後でビーチー將軍が私に向つてつくづくその眞情を漏らされた、「自分も實に失敗をした、あまりに立派な戰艦だから、これは旗艦の次において大いに戰の時に役に立つと思つたところが、全く當てが外れて戰果の上に多大の損失を招いた」と述懷せられた之れは極めて大切な戰訓である、實際戰艦が出來ても、それの魚雷なり大砲なりと乘組員がやはり心が合はなければならん、軍艦其物は死物ではあるがその乘員としつくり調子が揃はなければ擊つ彈が中る筈がない、魚雷も中る筈がないのでありますから、米國のこの艦隊が整備して日本の主力艦よりこちらが何パーセント上になつたから、さあ一つ日本をやつつけろといつて攻めて來たところで、それが日本の艦隊に非常な打擊を與へるなんといふことは思ひも寄らないのであります。更にその訓練が十分に出來上つたと致しましても、今度は精神力と意氣込みといふものが今のアメリカ、イギリスの士氣では到底我が海軍の敵ではないことは明かでありますのみならず、米英の戰艦といふやうなものは日本の航空機に取りましてはいゝ的であつて、日本の航空機の前には

もう全く顏が上らないのであつて、威力がないのであります。夫れかあらぬか最近アメリカでは戰鬪艦の建造を手控へして、航空母艦の急造に全力を注ぐことに決定したと議會の委員會で當局の聲明がありました、惟ふにアメリカは今後主力艦隊を以てする日本との決戰は全く斷念して專ら航空母艦と潛水艦に依るゲリラ戰を以て日本に對抗することに諦めたのでありましよう、實際夫れよりほか一寸手の出しやうはないと思ふ。しかしそれも太平洋に根據地を持つて居つての話でありますから、假に戰艦が出來、或は航空母艦等が相當に出來たにしても、根據地といふものが十分でないとまるで手が出ない、即ち濠洲に對し最近アメリカは今までと違つて非常に力瘤を入れてこれを擁護して居るやうに見えるのもこの點にあると思ふのであります。實際問題としては今日の如く濠洲の北の方面と我がニューギニヤの南の部分とで、かういふやうに相對峙して航空戰消耗戰をやつて居つたのでは、これは日本に取り必ずしも得策としないのであります。この攻防戰に於て向ふの飛行機五十機を擊ち墜す爲にはこちらも十機位のやはり損耗を覺悟しなければならん。向ふが五千臺持つて來ればやはりこちらが一千臺位なものを用意しなければならぬといふことになりますから、アメリカのやうな物資豐富で飛行機をどん〳〵多量に生產するものに對して、こちらの大切な飛行機をあまり損耗しては將來の爲不利であり、その邊はアメリカ、濠洲あたりに對する作戰上にはいろ〳〵そこに考慮の必要があるだらうと思ふのであります。

そこで戰爭の見透しといふことになるのでありますが、日本がインドの方に向つて力を注ぐか、或は濠洲の方に手を著けるか、更にその方は現狀維持位で支那の方に向つてうんと力を出すであらうか、かういふことが世界での問題になつて居るわけであります。濠洲を失ふといふことは只今申上げましたやうにイギリスにとり、殊にアメリカにとつて非常に痛手であるのでありますが、日本がセイロン島を越タて印度洋の西側に顏出しをするといふことになるとすれば、自然このフランス領のマダガスガルといふものが問題になるわけであります。このマダガスカルを根據として印度洋を制するといふことになれば、イギリスは最早崩壞の第一歩どころではない、半ば崩壞に陷るといふ次第であります。そこで日本にこのマダガスカルを利用されては一大事といふので、チャーチルは義理も外聞も打忘れて大急ぎでこのマダスカル占領の先手を打つた次第であつて、この五月十日の夜チャーチルのラヂオ放送に曰はく「現在吾々は地中海から閉出されて、東洋への道としては喜望峰迂回の蜿蜒たる航路が殘されて居るのみになつた、かくて大英帝國の最後の時は到來したといふ考へが一般的となつた、しかし吾々は斷じて武器を捨てない、今吾人に取つて最も重要なのは印度洋に於けるマダガスカルである、若しマダガスカルが日本軍の手に落ちることがあつたならば西アジヤ、インド及び濠洲に對するイギリスの輸送路は完全に破壞されるのである、自分は――チャーチル――マダガスカル占領を計畫し、軍隊を出發せしめてから實際にその軍隊がマダガスカルに上陸したとの報告に接するまでは實は新聞を見る度に日本軍が既にマダガスカルを占領したとか、又は日本軍がマダガスカルに向ふイギリス軍を途中で阻止したといふやうな記事が出ては居ないかと胸も張り裂ける程恐怖に戰いたのである」云々と更に曰はく「しかし自分は我がイギリス軍が吾々に取つて最も弱點であるマダガスカルを確保することが出來たので胸を撫で卸ろした、いづれにしても聯合軍海軍は今後も旺盛な戰鬪意識を以て積極的に攻勢に出るであらう、それには十分な武力を集め得るだけの時間が必要である、」云々と悲壯な放送をやつて居る、實際日本が印度洋を制するといふことになればペルシヤ灣や紅海は當然日本の繩張りの中に入ることになる、さうして日本とドイツ、イタリヤとの握手がこゝで出來ることに自然なるのであります、インドの獨立といふものも愈〳〵實現の色が濃厚になる、又このヨーロッパとアジヤの方との連絡が海でつくといふことになればお互ひの間に物資の融通がつくわけであつて、樞軸側の戰鬪持久力といふものは彌が上にも强大となつて、日獨伊不敗の地位いよ〳〵固く、一筋に大勝利の場面に直進することが出來るのであります。今日のところはアメリカとイギリスはこの大西洋を中に挾でん本當にいゝ連絡が出來て居つて戰略上にも、物資の方にも非常に便利を得て居るのでありますが、日本の方とドイツ、イタリヤの方とはこの間に印度洋があり、陸にはソヴイエット・ロシヤがあつて、この間は一寸隔緣されて居る姿であり、所謂靴を隔てゝ痒きを搔くといふやうな憾みがあるのであります

すが、印度洋から紅海、ペルシャ灣がこちらの手に入るといふことになれば樞軸側は非常な便利を享有することになるのであり之に反して、英米側は單に大西洋だけが自分の繩張りといふことになるわけである、そこでこの大西洋の交通破壞戰といふものがいよ〳〵眞劍となり、いよ〳〵深刻となつて、結局この船腹問題から英米側が遂に屈服の已むなきに至るであらうといふことがいはれるのであります。

それで前大戰に於てもこの船腹問題はなか〳〵容易ならぬことであつて、實際イギリスはもう少しで危かつた、詳しくはもう觸れませんが、この前の大戰の第四年目即ち大正六年の二月から獨逸は無制限潜水艦戰を開始したのであつて、その年の四月が最もイギリス側にとつては惡い、大損害の月であつて、一ヶ月に四百七十艘、八十七萬噸といふものが失はれた、これが貨物と一緒に船が海底に葬られるのである、毎月平均にして三百三十艘、六十三萬噸の船が沈んで行き、而もその聯合國側はイギリス、アメリカ、フランス、イタリヤ、又日本も入つて居るのでありますが、そこの造船所で全力を擧げて船を造つても月に三十萬噸しか出來ない、そこでどん〳〵世界の船が減つて行くといふことになる、この大正六年の秋から翌年の秋迄一年の間に英、佛、伊三國で國民の生活上、又戰爭繼續上海外からどうしても輸入しなければならないといふ絶對必要の食糧、軍需品、軍用資材といふものを積つて見ると、イギリスが二千五百萬噸、フランスが三千八百萬噸、イタリヤが二千萬噸合計八千三百萬噸といふもの、これが一年の間にそれ〳〵運ばれて來なければ英佛伊の國民の生活が覺束ない、生きて行くことが出來ない、況んや戰爭の繼續なんといふものは思ひも寄らぬといふ慘めな有樣になつた。そこで各國共必死になつて潜水艦狩りを實施したが中でも最も大袈裟であつたのはノールウェーの西岸からスコットランドの北端の島まで延長實に二百三十海里、之を陸上の距離にすると丁度東京から神戸迄その間をすつかり七萬個の機械水雷の屏風を造つてしまつた、それで水際の上の方を通つても、下の方を通つても必らず機械水雷にかゝるといふやうな非常な設備をイギリスとアメリカでやりました、之れは相當に潜水艦狩りには効果があつたと云はれます、尙ほドーヴァー海峽などにも二十三萬といふ機械水雷を使つて居る、さういふやうにしたのでありますが、翌年の大正七年春になつても潜水艦の商船撃沈の方が聯合國の新造船の噸數よりも多いこと、毎月平均十萬噸以上になるのであります。そこでイギリス、フランス、イタリヤの絶對必要の物資が果してこの危險な海を越えて輸入が出來るか出來ないかといふことが非常な問題になつたのでありまして、イギリス國内はあと六週間ほか糧食はないといはれたのもこの時であつて、船腹不足で英佛等は遂に屈伏の已むなきに至るか、夫れとも獨墺側の自給續かず一と足先きに手を擧げるか、此時分が正に天下分け目の極めて重大なる時機であつたのであります、然るに英佛側の必死の努力漸く功を奏しこの四月から新造船が撃沈の數よりか幾分增加して來るといふことになり、夫れにアメリカも參戰を致しまして、二百八萬の大

軍を佛國戰線に送るといふことになつたのに反し獨逸側は包圍的封鎖が愈〳〵嚴密で、物資食糧の缺乏其極に達し遂に騷動なども起ることになつて、その十一月十一日遂に力盡きて無條件降參をしてしまつたのであります。

然らば今日に於ける米英の船腹の實狀はどうかと云ふにイギリスは開戰當初自國の船とそれから同盟國、中立國及び敵國から購買若くは奪取した船を合せて大體三千萬噸船腹を有して居つた譯であるが漸次擊沈せられて大いに減少し、其後の購買船や新造船を加へても僅に二千萬噸位ほかない、其內から破損修理船や軍用官用等の徵發船を差引くと航海用船腹は精々一千萬噸に過ぎない、之れは英國が食ふ爲戰ふ爲に今日是非共海外より輸入しなければならぬ物資食糧の輸送用の實に最小限の船腹である、それからアメリカの方は最初は參戰の心構へはなかつたので例のソロ盤勘定から、自國の船を相當多數イギリスに賣りつけた、兎に角二百九艘、百二十萬噸といふものをイギリスに讓り渡して居るが、その中には八十艘の油槽船もある、それで今日アメリカでは油を運ぶ船が大不足で東海岸と西海岸の油の輸送が出來ないために、一方では油が餘つて非常に困つて居るのに、他の地方では油缺乏で自動車の使用にも非常な制限で大弱りと云ふ自業自得に惱んで居る。アメリカは反樞軸の兵器廠、軍需廠を以て自任して居るが、資材の蒐集にも製品の輸送にも、援英、援ソ、援蔣にも南米を手なづけるにも、自國濱岸の交通にも船腹不足で大弱りである、元來アメリカは古船が多くて今日輸送腹船は七百五十萬噸位、夫れで新造船は今日の處英國が年に六〇萬噸、米國が二百萬噸程度で米英を合せて毎月平均廿五萬噸には達しない、夫れに日獨伊で毎月九十萬噸乃至百萬噸宛擊沈するのでは米英手持の船腹は減少する計りで手の著け樣はないのである、更に海上船員の不足には大恐慌の體で現にニューヨークの岸壁にも荷物滿載の船が多數に繫きつ放しの儘になつておると云ふ、乘員が居らぬので出港出來ないのである、ついこの四月でありましたか、アメリカの檢事總長が一萬八千人の外國の船員を捉へて牢に入れたといふので大センセージョンを起した、夫れはアメリカやイギリスの船には危いから誰も乘らない、そこでオランダ、ベルギ、ノールウエー、デンマークなどの外國船員でアメリカに居る者を强制乘船の爲に捉へたのだと云ふ、實際大西洋では昨年の秋までの二年間でイギリスの海員で沈められて死んだ者が四萬一千人に上つて居る、今年の夏までにはどうしても五萬人以上死んで居るといふことである、それからアメリカの船の沈められたのも、開戰以來僅か十日目であるが、既に三百何十艘、二百萬噸を越へ、その船員は四千から五千の者が失はれて居る、油槽船などは乘つて居た者は全部全滅で、一人も助かつて居ないと云ふ、又たイギリスの方で使用して居る船は四分の一が外國の國籍に屬するのであるが、この外國の國籍にあるもので戰死したものが矢張り一萬人を越えて居る、かういふのが實情であるから、新造船は急には出來ないが、出來てもそれに乘る者を集めるのがなか〳〵容易ならぬ。かういふことになつて現在の世界大戰といふものは、結局船腹問題で戰

爭の繼續が不可能になり、又民心が離反して、國家社會に騷動が起るといふことになつて、こゝにイギリス、アメリカの崩壞滅亡といふものが現はれて來るのではないかと思はれる。さうしてその時期といふものはあまり遠い將來ではないと思はれるのでありますが、さりとてそれが今年一杯であるとか、或は來年の夏は確かだといつたやうなわけには參るまい、なんといつても相手は世界の最大强國であり、頑張り屋のアメリカ、イギリスでありますから、彼等を屈服させる時期といふものは果して吾々の要望通りに輝かしく、而も遠からず到着するかどうか、これは主として吾々國民の今後の努力如何にかゝつて居ると思ふのであります。即ち獨り戰場にある第一線の將兵ばかりでなく、吾々銃後の國民も銘々の立場々々にあつて自分の犧牲に依つて國家を勝利に導く、かういふ大精神を發揮して、何年戰が續かうが、又物資缺乏、生活困難、經濟壓迫その他どんな困難が起つてもそれに屈せず、撓まず、必ず戰爭に勝ち貫くといふ大信念を以て、斷乎として押し通す、かういふことでなければ勝ちは得られないのであります。實際今度の戰爭は國民と國民との間の力比べ、根比べで勝つか敗けるかといふことが決まるのであります。即ち日本が戰爭に勝ち貫く力といふのは、これを實際的の仕事に當嵌めて申しますと、國家の生產力を高めるといふことゝ、社會の不安を除くといふことのこの二つにあると思ふのであります。夫れには何うしても國民的の自覺を昂めて、國民が互ひに團結を固める外ないのであつて、日本といふ國家はこの俺が支へて居るのであるといふ自覺が吾々國民、御婦人でも學生でも誰でも切要で、一人々々がみなこれ國家の柱であり、したがつて今日の日本を勝ち貫かせるのはこの俺の力だ、この俺の犧牲でやり遂げるのだといふ自覺を國民全體が持たなければならない。この國民銘々の自覺こそ實は億兆一心、擧國團結の基調であり、又國家を押し進める眞の原動力であるのであります。かういふやうにして出來た國民の偉大な團結の力こそ取りも直さず國防そのものであつて、意義のある本當の國防といふのは即ちこれである。我れにこの眞の國防があれば米英の屈伏は必然の結果であり、今次大東亞戰爭の目的遂行も、又東亞恒久の平和を確立すべき吾人の大使命も輝かしく實現せられるのであります。これを以て私の話を終ります。（拍手）

講演

イランより歸りて

（昭和一七年七月二日日本會講演）

元イラン國駐劄特命全權公使　市河彥太郎

只今御紹介に與りました市河でございます、丁度二ヶ月程前ロシヤを通つてイランから歸つて參り

ましたが、もうイランと日本とは外交關係が斷たれてしまひましたので、文字通りイラン國のいらん駐劄公使といふことになつしまひましたが、しかし最近のいろ〳〵の方面の戰爭の推移を見てみますと、なか〳〵いらん國どころか、だん〳〵あそこが今度の戰爭の關ヶ原の大詰めの一番大事なところになつてゐるのではないかと思はれます。所がさういふやうに今度の戰爭の一番重要な最後の土壇場の關ヶ原のやうな重要地點になつて來たにも拘らず、この方面のことにつきましては、日本側にあまり詳しく傳つて居りませんし、なにかぼんやり夢の國のやうに思つたりして、イランとイラクとを間違へるとか、イランと蘭印と間違へたりしてゐる。現に大學を卒業した私の友人がイランとペルシャが同じ國だといふことを知らないで、「君はペルシャに行く、ペルシャに行くといつて、實際今日夕刊を見たら君はイランに行くのぢやないか」「だから、それでいゝではないか、イランとペルシャは同じぢやないか」と言ひました處、「あゝさうか」といふ譯で大笑ひでございました。大學を出た人にもこんな間違ひを平氣でやる人が居る位ですから、一般の人はペルシャとイランと同じだといふことを勿論知らないで、タキシイに乘つて、運轉手に「君はペルシャを知つてゐるか」といふと、「知りませぬね、」「イラン」といふと、「それならこの頃新聞に出てゐるあれですか」「さうだ。しかしその二つは同じだぜ」といふと、「へえ」といつてをつて、おどろいてゐるといふやうな始末です。一般に、昔の本を讀む人はペルシャを知つてゐるけれども、イランを知らない、若い人はイランを知つ

てゐるけれども、昔のペルシャを知らないといつたやうな工合で、さつぱり本當のことが分らないらしい、どうも誰もはつきりあの方面については認識を持つてをらないやうです、勿論私もたつた一年しかイランにをりませんでしたので、あまり詳しいことも存じませんけれども、それでも見たまゝ聽いたまゝを少しばかり申上げまして御參考に供することに致します。

唯今も控室で伺ひますと、歸朝以來私がイランの話を方々で申上げるものですから、「君のはこれで二度目だよ」と仰しやる、中には「三度目だ」と仰しやる方があつて、どうも私の手品の種をよく御存じの方が多いのでございます。それで同じ話を同じ順序で何度も繰返すのも非常に智慧がないやうに思ひますので、非常に恐縮でありますが、私はさういふ同じ話を聽きにいらつしやる方にいつでもお詫び旁々面白い話を一つすることにしてをります、これは一寸皆樣が御想像にも及ばないことゝ思ひますが、日本から數千哩隔つたイランでは非常に日本のラヂオがよく聽えます、日本のだけが聽えるのではなくして、イラン高原の高いところでは空氣が乾燥してゐる關係か、世界各國のラヂオが實によく聽える、私の持つてをりましたのは十二球のバイヤールといふスイスの機械でありましたが、ロンドン、バリー、ベルリン、モスコー、ローマ、南アフリカ、インドのニュー・デーリ、サイゴン、重慶のデマ放送、東京、アメリカの方はボストン、ニューヨーク、それからパタヴイヤ、シドニー等世界各地のラヂオが自由に聽えます、雜音が入らず、東京で聽く東京のニュース位はつきり聽

えます、それでございますから、東京放送局の朝五時半のニュース、國民の誓、愛國詩の朗讀、琵琶、三味線、筑前琵琶、薩摩琵琶、浪花節、河東節、清元、哥澤、小唄等何でもよく入つてまゐります。落語など私は大好きでありますから、落語をかけ放しにして晝寢をしながらラヂオを聽く、實に東京にゐるのとちつとも違ひませぬ、その時きいた話であります、それはあの有名な林家正藏さんの落語です。何でも若い人の非常に元氣のある軍歌を唱つたあとで出て來て、私も落語家に生れて、この非常時に當り生き甲斐を感ずるために、大東亞戰爭以來一つ元氣な力强い聖戰完遂的なことをやらうと思つて、大分工夫してみましたが、どうも落語ばかりは力强い落語とか、勇氣凛々たる落語といふのはむづかしくて作れない、仕方なく相變らずお古いしなびたやうなお話で我慢していたゞいてをりますが、「そんな話は二度聽いたよ、三度目だよ」などゝ仰つしやるお客樣もございますが、私の方からいはせて頂くと、元來同じ話を二度も三度も聽けるなんていふことは目出たい話で、お年寄の御長命の方でなければ、さういふことはやらうと思つたつて滅多にやれるものではございませんので、去年も聽いた、又今年も聽いた、來年も同じ話を聽いてやらうといふのは、それこそ御長命の印なんださうでした、まことに御結構なお話ださうでございます。まあ精々御長命のお印と思つて、お年寄の光榮を以て聽いて戴かなければ仕方がないといつたやうなことを云つてゐるのを聽きました。私も自分の話を繰返し〳〵申上げるので、なんだか智慧がないやつだと思召しかも知れませぬが、それも

御長命の印で、まことに御結構なことゝ思つて聽いて戴くより仕方がないのでございます。私が方々に行つて話を致しました經驗に依りますと、割合に若い方よりもお年寄の方が非常に熱心に聽いて下さる、私もよく男と生れたからには男の人に惚れられる位でなければ駄目だといふことを聽いてをりましたが、私も今日お集りの方々のやうなお年寄の方に何遍も聽いて戴くといふことは光榮にも思ひますし、また有難く思つてゐる次第であります。話が終りまして、あとでよく質問になりますと、最後までお殘りになるのはみな非常なお年寄で、七十、八十位の方が一番熱心にお聽き下さるので、なにか不思議なやうな氣が致します。中には「私は年寄つてから忘れつぽくなつたので同じ話は三度位聽かないと駄目ですなんて仰つた熱心家もありました。いよ〳〵本論に入ります。由來日本人は東洋といへば大體支那を中心に考へてをつた、ところが大東亞戰爭以來は東洋といひましても、インドあたりまで考へるやうになりました。私から申しますとそれでもまだまだ十分ではありません。どうしてもスエズ以東の諸國、又スエズの南の方のアフリカまでを一つ考の中に入れて、大きく世界政策を考へて戴かなければならない時が來たのではないかと思ふのであります、ところが今まで日本で出てゐるイランとかイラクの方面のことを書いた本が誠に少いのでございまして、その方面のことはさつぱり知られてゐなかつたのであります、殊にペルシャについて僅かに知られてゐたことは、その古い文明や文化についてであつて、現代のイランについては殆んど誰もよく知らなかつたやうな狀態であ

りました。古代からペルシャは詩で有名でありました。あのフェルドーシ、サーディ、ハーフイズ、オマル・ハイヤムとか、支那でいへば李太白とか白樂天とかいふやうな非常にいゝ昔の詩人がをりまして、それが星の歌を歌ひ、薔薇の花を歌ひ、それからお酒のうまいことを歌つたりするから、ペルシャといふと、星が美しくて、薔薇が美しくて、酒がうまいところであるかの如く、つまりなにか悠々たる非常にのんびりした美しい夢のやうな國だといふ印象があるのであります、勿論私はそんな一面のあることを否定するのではありません。ペルシャにはたしかにさういつた一面がございます、又その一面を抜きにしては完きペルシャは判らないけれども、飽くまでもはつきりして認識して置かなければならないことは、それは昔のペルシャ、古代の文化とか傳統、歴史の流れを汲んだペルシャであつて、現在のイランではないことです。ペルシャは一九三五年、今から七年前に國名をイランと改めました。イランと改名後のペルシャ或は一寸遡りまして、この前の世界大戰の以後のペルシャは、さういふ夢のペルシャとは全然違つた現實的のペルシャです。非常に榮えた古代文明のペルシャと近來國勢衰へて見る影もない哀れな弱少國としてのイラン、この二つのペルシャ、古代のペルシャと現在のイランとをはつきり分けて認識致しませんと、どうもいろ〳〵な點に於て判斷を誤ることになります、勿論一九二五年リザ・カンが立ちましてパハラビ王朝を立てましてからは、崩れゆかんとする古代からの由緒ある國を近代國家として建直さうとして努力し、その結果も又大いに見るべきものが

ありました。併し何と云つてもその明治維新にも比すべきリザ皇帝陛下の偉業も昨年八月二十五日の英ソ軍の侵入で一頓挫を來したといふ譯で、今度も幾多の波瀾が豫想される現狀であります。併し何と云つても古代文化を背景にしたペルシャは偉大です。殊に美術の方からいひますと、私はこれは世界の寶の國といつてもいゝではないかと思ひます、現にあのペルシャの絨毯、これなどは日本に持つて參りますと一平方ヤール三百五十圓位するのが相場と申してをりますが、現地では大體十分の一で買へます。それからミネアチユールと申しまして、非常に日本の昔の佛畫のやうな、支那の繪の影響を受けた綺麗な繪がございます。それから手の混んだ銀細工で作つたもの、それから象嵌細工の非常に美しい鐵器類、それからあの國は日本と同じやうに行書、草書、楷書といふやうな書道がございまして、一口で申しますと、釣針を大きくしたやうな、形をした字でございますけれども、唯意味が通じればいゝといふわけでなく、書き方がうまいとか拙いとか、雄渾だとか壯麗だとかいふことをいつて、字の書き方の美しさをやかましく言つて觀賞する、さういふ東洋的な習慣もございます。ペルシャ更紗といふテーブル・クロスなどに使ふに非常によいものもございます、その外特にいゝ物としては陶器、磁器、土の中から掘り出された昔のコバルト色の綺麗な壺だとか皿だとか、これは丁度支那の陶器が大切にされたやうに、もう少し一般の人に知られたならば、恐らくペルシャの陶器は日本あたりでも支那の陶器にも優して珍重されることゝ思ひます。さういふいゝ美しい物がどつさりありま

す、それが非常に安い、例へば古いお金、古錢、それなどもアレキサンダー大王の侵入時代とかダリユース一世時代と言つたやうな古いものからずつと揃つて、骨董屋などに行きますと山のやうに積んであつて、ほしいまゝによい意匠の物が買へます。古錢を集めてゐる人にとつては垂涎措く能はざるところでございまして、その外には銅や鐵などの青く錆びた彫刻などもどつさりございますから、恐らくテーランに皆様方がおいでになりますと、特に美術のお好きな方でしたら、去り難い心持がなさることゝ思はれます。なんといつても昔からの寶の庫、永久にこれは世界の寶の庫として殘るべき國ではないかと思ひます、私は古代文明を背景にしたペルシャを褒めることに於ては人後に落ちないつもりでございます。

ところがそれと對照する現在のイランは、この古代の輝かしい歴史と文化を顧るとき淋しい氣持ちがするほど國勢が衰へて居ります。なぜそんな大國、歐亞にまたがる強大な國がそんなになつてしまつたのかと申しますと、それにはいろ〳〵原因があるのでございます。先づ第一に考へなければならないのは氣候のことでございます。アメリカの或る學者でハンチントンといふ人の書いた「氣候と文明」といふ本が岩波文庫から出てをりますが、それに依りますと、世界の雨の降る場所とか降り方が時代によつて非常に變化があるのださうでありまして、昔はイラン地方も相當雨が降つたけれども、その後雨の降り方が變化したためにそれでなくてもイランの北方と南方には大きな山脈があつて、北

のカスピ海から來る濕つた風、南方ペルシャ灣から來る濕つた風が中央部に入つて來ない爲、その邊一帶が乾いてしまつて、殆んど外蒙でも思はせるやうにびら〳〵僅かばかりの草が生えてゐる、赤土の原になつてしまふ程でございますから、雨が十分降らないやうになるといよ〳〵砂漠的になつてしまひます。砂ではなく赤土の原ですから、水があれば、千里の沃野となつて、實に木も草も繁茂する筈ですし、水さへあればその邊一帶の綠地になるのでありますけれども、なんといつても水がない、ないのですつかり赤土が丸裸になつてをりまして、その上に作物が出來ないので、止むを得ず羊を飼つて生活するといふ譯であります。經濟史の段階からいへば農業時代以前の牧畜時代の生活を、農業時代、工業時代が來ても尙やらなければならないやうな衰れな土地柄でございます。したがつて生活程度はあまり高くなれない。土地の廣さは日本の二倍程ございなすけれども、人口は千五六百萬しかゐない、それ以上殖ゑることが出來ないといふやうな狀態であります、その上に國際關係上からいつて非常に悲劇的な地位に置かれてゐるのであります、なぜならば北の方にはロシヤがございますし、南の方にはインドを始め英國が勢力を振つてゐる地方がありまして、これが平和の時には貿易を盛んに行つて、相互に利益をあげてゐるやうなものゝ、惡い時には絶えず軍事的壓迫を被つてをります。近世のイランの歴史を見ますと、英ソの勢力爭覇の歴史でありまして、双方相爭つてゐる時には第三者として漁夫の利を占めてをりますけれども、英ソがなにかの形に於て妥協すると結局北の半分はロ

シヤ、南の半分はイギリスが強大なる勢力を振ふ足場に使ふといふやうな悲劇的な立場に置かれてをります、その著しい例は一九〇七年、つまり日ソ戰爭直後にロシヤが極東に於て敗れまして創痍が癒えなかつた時でありますから、あまり他の方面で事を起して失敗しないやうにと、イギリスの方へロシヤの方から手を伸ばし、大體南の半分をイギリス、北の半分をロシヤの勢力の活動範圍として妥協が出來た、ところが一九一七年ロシヤに赤色革命が起りまして、レーニンの東洋政策、それの底の意味にはいろ〳〵な魂膽があつたのでございますけれども、表面から見ますと非常に寛大な對東洋民族政策を採用し、北方に持つてをつたロシヤの利權を全部投げ棄てゝ、一切の不平等條約を廢棄したのでありまして、そのためにイギリスの方でもその時から暫時イランに對する壓迫の手を弛めて、結局兩方とも手を引いた形になつて參りこゝにペルシヤも浮び上つて來たわけであります。

ところが今度第二次世界大戰が始りますと、强敵ドイツに當るためにロシヤは今までの歴史的の恩怨を忘れまして、イギリスと手を握つてイラン經由の援ソ物資を貰ふことを策し、又イギリスとしては昔のアレキサンダー大王の印度征服、ムガール人の侵入の時の教訓により、印度に對する進入は西北の方からと決つてをりますから、同じく西北のコーカサス方面を通つてやつて來さうなドイツ軍に對抗して、インドを守るにはどうしても、イランまで進駐して、そこでインドを防衛しやうと云ふ政策を立て、結局そこで妥協がつきまして、共同の敵ドイツを前にしてイランの北部にはロシヤ、南部に

はイギリスの軍隊を入れたのでございます、それでこの侵入の日、即ち去年の八月二十五日以後は完全に兩國の軍隊に占領されて、殆んどイランは動きがとれない全身不隨の國となつたのであります。ではなぜその時にイランは抵抗しなかつたかと不思議にお思ひになるか知れないが、實は私共も現地でその情ない有樣をみて他事ではないやうに憤慨いたしました。敗れてもよいから一戰やつて貰ひたかつたと思ひます。それを約四十萬の常備兵がありながら、發砲した者は殆んどない、殆んど眞面目に戰つたものはないと云はれ、或る飛行將校が非常に憤慨して、停戰命令が出てしまつてから、胸に收まらないものがあるものですから、勇敢にもぱつと飛行機で飛び出したさうです、ところが味方の高射砲が「あゝあんなものが命令に背いていけないからあれを撃て」といつて撃つたさうですが、それが高射砲を撃つた最初でさうして最後であるといふやうに、殆んど笑へないやうな話がある位です。侵入されたのと殆んど同時に停戰命令を出し、敵軍によつて武裝解除をされ、武器の大きい部分を安く賣收されてしまつたなどゝ云ふことは一寸我々には想像のつかないことです。現に英ソが侵入して參りまして、いよ〳〵首府へ侵入してくる時は、吾々の氣持からいへば、少くとも軍人は軍服を着てボヤ〳〵散歩するのは恥しくて出來ないだらうと思ふけれども、その日でも平氣で街を散歩して女を伴れて歩いてゐる。私などはすつかりこれで匙を投げてしまつたのであります。どうしてこんな狀態に陷つたのかと申しますと、それには近代文化に取殘され、時代に遲れてしまつたイランの惱

み、つまり生活文化に於ける舊體制的なるものから、脱出しきれない、ことに形式はとにかく、精神的に近代國家として確乎たるものが確立してゐなかつたことが、その原因だと思ひます。御承知の通、近世のイランはその地位、勢力が衰運にかたむく一方であつたところ、この前の世界戰爭が終つたのちも、北はロシヤ、南はイギリスに占領されてをりまして、下手をすると獨立も失ひかねない窮狀に逐ひやられたのであります。その時コザックの隊長のリザ・カンが憤慨して立ち上り、到頭兩國の軍隊を追ひ拂ひまして、一九二五年推されて皇帝となり、パハラビの王朝を興したのであります。たゞお氣の毒にも昨年又英ソ軍に侵入され、その際廢帝になりまして、今インド洋のモウリシヤス島に流されて居ります。イラン人は「インド洋が日本の制壓下になつたら成べく早く私共の皇帝を救ひ出して、もう一遍イランに戻して呉れるやうに日本の海軍に賴んで呉れ」といふことをいつてをりました。このパハラビ王朝の第一世リザ皇帝陛下は非常に勇敢な、ラジカルな實行力のある英雄でございまして、一九二五年から諸政の大改革を斷行し、官吏の非能率的なことを改めたのでありますが、何と云つても一般の人達は非常に知識も低く、生活の程度も低い、一切の文化水準が非常に低いために一人の英雄がいくら努力してもさう急には十分なことが出來ない、殊に一九二五年から今まで十七年間では、いくら努力して見たところが希望するほどの業績が上らないのです、勿論形式上から見れば近代的の表面的にはしやれた建築も作られ首都テーランの町などは近年面目を一新する程立派なも

のとなりました、併しそれはほんの形而下の問題で、見た目によくなつたといふ丈で、精神的な方面ではまだ〳〵といふ狀態だつたのではないかと思はれました。教育なども、小學、中學、大學までも一應形式は整ひましたし、女子教育なども進み、從來マホメット教の惡影響で、婦人の地位も低くて問題にならなかつたのでありますが、これが解放を行ひ、ベールを取つて街でも自由に散歩するやうにもなりました。しかしそれも形式丈が一應整つたと云ふ程度で、その內容の充實と云ふ點になりますとまだ十分ではなかつたやうです。軍隊にしても常備軍四十萬もあり、外國の新しい兵器を輸入して、裝備も相當よかつたのですが、軍人精神の確立といふ點から見ましたならば、少くとも今度の英ソ侵入の時の狀態から判斷しますと、未だ十分であつたと云ふことは出來ないと思はれました。リザ皇帝陛下の行はれた明治維新的の大改革から十七年、つまり明治十七八年から二十年位のところを歩いてゐたのだと見れば大體の見當がつくと思はれます。陸海軍が編成されてどうやら中央集權が出來上り、農業を中心とした封建時代が倒れて中央政府が出來、それから又宗教的にいふならば中世紀的な全體主義的の教權萬能で、結婚でも、戸籍のことでも、教育でも一切を坊さんがやつていつた寺小屋的のところから近代的の國家へ移行し始めて、やつと二十年といふところでガタと又今度の事件で挫折して、覇業半ばにして倒れてしまつた譯であります。つまりイランは善い意味に於ても、惡い意味に於ても舊體制的なのです。例へば人と人との交際にしても非常に悠長でよく云へば奥床しく、

わるく云へば非能率的です。といふのは卑近な例を申上げますと、みなさんのお子さんが大學を出まして、さて就職の問題が起つて來たといふやうな時に、どこかの知つていらつしやる會社の社長に電話で「君、息子が大學を出たからよろしく頼むぜ、さよなら」といつたら、恐らく社長さんも驚いて無禮な奴だと怒るだらうと思ふ。さういふ時には普通お遣ひ物でも持つて息子を伴れて行つて、「今度大學を出たからよろしく頼む」といつたやうな行き方が禮儀で、東洋の國は大體さういふ風になつてゐる、ところがペルシャといふ國はそれが又そのやり方が非常に悠長で非常に古風です、したがつて或る人がこんなことをいつてをりました、例へば絨毯一枚買ふにも、つか〳〵と店に入つて行つて「あそこの赤いのを見せて呉れ、上から三番目の青いのを見せて呉れ」などといふと、「なんだ、これはものを知らない、禮儀を知らない、挨拶を知らない奴だな」位に思はれるさうです。聞くところによると、そんなときにはどういふやうにやるのかといふと、「この頃雨も晴れて夏らしくなつて白い雲も飛んで來るやうになつたね、お互ひに家族が丈夫で結構だ、時に大變綺麗な物をお持ちにたつてゐるさうだが、そのうちにゆつくりやつて來るから見せて呉れ、今日は急ぎますから、さよなら」と第一日目は別れ、二三日目位にまた「一つ絨毯を見せて呉れ」と頼みそれからいろ〳〵の商賈が始まるので、「よろしかつたら家に持歸りゆつくり拜見したい」といつて、家に持つて行つて、一週間も二週間もかゝつて値段を交渉して買ふなんといふやうな仕組になつてゐるのださうであります、どうもこれは話半分で眉唾ものかもしれませんが、どうもそんな一面があるやうです。ですから日本人やアメリカ人がすぐ飛び込んで行つて、いきなりその日のうちに金を拂つて「持つて來て呉れ」といふのは、社長さんに電話で子供の就職を頼むのと同じやうに、非常に唐突なやうに思ふ、私共も或る種のアメリカ人のやうに一君の家は一坪いくらした、さうして家は幾間だ、それから靴はいくら、ネクタイはいくら、さうすると君の着てゐるものは全部で二百圓以下だね」などゝ云つたとすれば、これは能率的とか事務的とか云ふよりも、不作法だと思うだらうと考へます。しかし或人に云はせればその方が非常にプラクティカルでエフィシェントでいゝぢやないかといふかも知れませんが、さういふやうな悠長な考へ方と近代的の能率本位の考へ方の喰違ひと申しますか、行き方の違ひと申しますか、處世のやり方に大きな差異があるやうであります。

別の言葉でいへば世界の交通から超越した、よくいへば桃源郷、惡くいへば全く時代に取殘された、舊體制のよさと惡さが殘つてゐるやうな國であります、ですからその舊體制のところを同情を以つて味ふならば、非常に面白味があるのです。いよ〳〵私共がイランを出て日本へ戻つて參ります時に、テーランからカスピ海のバハラビ港まで自動車で、山を越える時に各自晝食用の辨當をみな作つて行かなければなりませんでした。しかし夜は町のホテルに泊るのだからと思つて我々は簡單に作つたむすびを二つ三つ持つて行つた、ところがペルシャ人の家に住んでをつた公使館員の人達が、さて

晝食だと云つて、沙漠の上でお辨當を開いてみたら、お醬油樽位の大きさの物を二つ重ねた位の辨當を持つて來たのでみなびつくりした、これはなんだといつたら、ロシヤを通つて行くのだから、食物が足りないとこまるだらうといつて、自分達の食糧の不足なのにも拘らず一晩中徹夜でパンを燒いて呉れた、一と抱えもある大きな薄い形のどら燒を大きくしたやうなパンです、さういふパンを二三十枚と雞の丸燒だの、牛肉のつけ燒、それから野菜の煮たのは腐るからいけないといつて、乾いた葡萄だとか、桑の實だとか、胡桃だとか、アーモンドの實だとか、兎に角一ヶ月位食べても食べきれないやうな分量のものを持たして寄越したことが判つた。つまり物見遊山、お花見乃至ピクニックにでも出掛ける時數家族總出で何十人の人が持つて行くやうな辨當を揃へて呉れた譯です。それを見た時に、私共一同、英ソ軍の侵入以來イランの態度にあきたらないやうな氣持ちをもつてゐたものでさへ、そのイラン人の純情に打たれて「イランにもいゝ所があるなア」と聲をそろへて言ひ合ひました。たしかにイランは大體に於て萬事舊體制であるが、舊體制ながらなか〳〵よいところがあると思つたのでありました。我々日本人は不知不識の間にアメリカ人のやうに頭が散文的になつてゐるので、これはもう少し詩的に見なければペルシヤといふ國は判らないなといふことをつく〴〵反省したのであります。さういふやうに吾々の散文的のスタンダードを以て判斷して一概にイランの現狀を攻擊するのは酷に失するかも知れないと思つたのであります、いゝにつけ惡いにつけ昔風の國だ、その昔風が多分に殘つてゐる國でありますから、桃源の眠りからさめて氣がついて見たならば外國軍隊がタンクと飛行機を持つて攻め寄せてゐたと云つたやうな工合だつたのでせう。機械文明と時勢に取殘されて國步艱難に陷つてしまつた、さういふやうな狀態が今のイランだと思ひます、しかしイランは人種はアーリアン人種と申しまして、ヨーロッパ人と同じでございますから、今自分達は國勢は衰へてゐるが、元々吾々はアーリアン人種だからヨーロッパ人と同じく優秀であるといつて非常に强い誇を持つてゐる。たとひ今いかに落ちぶれてゐても、「私の祖先は何々皇帝の侍從であつた」とか「私の伯父さんは總理大臣の祕書官をやつた人であります」といつて見たり、「私はこの前の文部大臣と非常な親友だ」といつたりして、なんでも祖先の偉かつたとか、なにか昔は豪族としての地位を持つてをつたといふことを必ず說明の中に入れる、しかし私はそれは考へ方に依つては負けず嫌いの消極的の向上心を持つてゐることを示すので、現在はかう衰へ果てゝゐるけれども、なにもこれで滿足してゐるのではない、吾々だつてもとはいゝ生活をしたこともある、惡い生活をするといふことよりいゝ生活がいゝといふことは知つてゐる、努力はするけれども、現在は遺憾ながらこのやうな生活をしてゐるけれども、これに滿足してゐるのではない、いつかは上つて見せる……と云つたやうな向上心の現はれだから、私はこれは高く買つてやらなければいかぬといふことを感じたのであります、あれはどこ〳〵の村の古い家だ、名家だなどゝいふことをよくいふ、つまり長い歷史、文化、傳說の上

に立つてゐる國ですからどうしても、古いことを誇るやうになる。アメリカではこの反對です。「私の祖先はリンコルンでした」といつて見た所で、現在その人が價値がなければ問題にされない。しかしイランでは何と云つても現在よりも過去の方があまりにも偉大で優れてをりますから、話の中心點がどうしても過去に陷る、殊に先程申しました美術では他國の追隨を許さないものを持つてゐるから、どうしても日常の會話にそれを持出すことになります、テーランの放送局も夜英佛獨でニュースを放送してをりますが、その時間がすみますと、すぐ考古學の話などを始める。この忙しい、世界全體ひつくり返るやうな大戰爭の眞最中に、ニュースを簡單に終つた後、「それではこれから考古學」といつて長々と、ニュースの時間の數倍もの時間を使つて三千年前の建築の話などをやります。そんなラヂオの使ひ方がペルシャ的と申しますか、イラン的と申しますか、そんなことがペルシャのラヂオの特徴であります。

それでは未來のイランはどうなるか?、只今申上げました通り昨年八月以來北の方からロシャ、南の方からイギリスの軍隊が侵入して首府迄も占領してをります、イラン人としましては、どうしても元通りの自由と獨立を回復したい、しかし目下の情勢では自力で以てやるだけの力がない。結局他力本願でやるにはなんとかして外國の助けを借りなければならぬ、それではその外國とはどこかといふと東から來る日本の勢力、それからコーカサスを通つて西から來るドイツの勢力より外頼るべきもの

がない。この二つの勢力を借りる以外方法がない。そこで表面上は無理矢理に壓迫されて英ソと共に三國條約を一月二十九日に締結しました、しかしその中に二つはつきりと留保を附してをります、一つは第三國、(勿論これは日獨伊等樞軸國を指してゐるのであります)が國境を越えてイランに進出する場合に於ても、イランは絶對にその國に對して軍事行動を執らない、つまりイランはロシャとイギリスが自國内で戰爭するのは勝手だけれど、その時に私の國があなた方を助けると思つてをつて呉れるな、飽くまでも中立で、その喧嘩には加擔しませぬよ、どうぞ味方となるなどゝ思つて呉れたら大間違ひだぞと釘を打つてゐるのであります、もう一つ、若しも將來イギリスとロシャとが兩方共に外交關係を斷絶した國があつた場合には、仕方がないからイランもその國とは國交斷絶する、しかし兩方の中どれか一國とまだ外交關係が殘つてゐる時に於てはイランは飽くまでもその國とは外交關係を持續するといつてゐる、それは非常に遠大な考へで拵へたり留保で換言すれば、それは必ず日本を頭において作つた留保にちがひない。即ち日本はロシャとは外交關係があるので、それとはこのまゝの關係を維持するといふのです。始めは英國が反對したけれども結局最後にこのイランの要求を入れたのです。當時イランとしては、これさへあれば日本とロシャとは外交關係があるから國際關係を斷絶しなくてもすむと考へたのでせう。ところが結局御承知の通りかうして私がイランから出て來なければならない、イランと日本との外交關係が斷絶した、その理由は一口にいへば大東亞戰爭勃發の結

果であります。先程申上げました通り英國としては今迄インドを守る爲には西北の國境さへ固めて置けばいゝと思つたのが、インドの歴史あつて以來始めての新しい出來事が起つてきた、即ち東南の海岸から敵が攻めて來るといふ情勢に陷つたのです。イギリスとしては百八十度の轉廻を行つてこちらの方面に主力を注がなければならなくなつた。さうするとイランの方はお留守になる、お留守になつた時に日本の公使館がそこにあつて彼等の狼狽振り、その軍備の缺陷等を逐一手に取るやうに觀察してゐるわけでありますから、それが日本の方にみな知られては非常に戰略上不利なわけであります、そのためにぜひ出て行つて貰ひたいと希望せざるを得ない譯であります、それからもう一つロシヤが今までは日本に對する義理から、なにも日本公使館を閉鎖させなくてもいゝぢやないか、といつてイギリスの要求に對して水を差してをつた、ところがあまり大東亞戰爭でイギリスがあへなく敗けてしまつたので、これ以上イギリスが沒落すると援ソ物資さへ貰へなくなる、今度はロシヤ自身が困つて來るから、これ以上イギリスの要求に反對することが出來ない、仕方がないから日本に對しては義理が惡いけれども、そんなにイギリスがいふなら仕方がない、英ソ伊の三國條約の上から云へば、その必要はないことになつたけれども、かうなつた以上敢て反對もしないといふ態度に出たので、到頭イランもイギリス側の壓迫に屈服して日本公使館に出て貰はなければ困るといひ出して來たのであります、その時も當局者は、本當のことを言へばイランの國民の九十パーセントは樞軸側の勝を望んで

ゐる、閣議でも議會でも極少數を除く外は日本との斷交に絶對反對であつたと云ふことを語つてゐた位でありました。しかし若しもイギリスの要求を容れないならば、インドの方から送つて寄越す穀物を、全部一切中止されるので、こんな情けない結果になつたのであると云ふことを語つてをりました。實際イランはもう食糧が足りない、これは配給方法が惡いといふやうな生溫いことではなくて、絶對量が足りないので、各地の治安上にも面白くないことが頻發するほどでありましたからイランとしては無理もない話であります。但しニュー・デーリのラヂオをきいてゐると印度自身食糧難で困つてゐるので、いつまで印度からの食糧補給がつづくかわからない。何しろその當時はまつたく氣の毒なほど政情の不安のときで、私共がイランを去つたときの首相スーヘリ氏の前任者のフルギ氏の內閣は三日で倒れた位でした。このフルギ氏はあそこの政界の第一人者で、恰度西園寺公のやうな位置を占められた方で、何回も總理大臣をなすつた元老、重臣です、この人が三日で辭めなければならなかつたといふのは、一旦內閣は組織してみたものゝ、當時の情勢では到底滿足に政治をやつて行く見込みがないといふので、就任後三日で辭表を提出された、ところが皇帝がなか〳〵この辭職をお許しにならない。ところが四日目の朝、フルギ總理大臣の家の戸が閉つてをつて開かない、無理矢理に開けて入つて見たら、書置が殘してあつて、「到底やつて行けないから私は一時身を引きます」といふ皇帝宛の辭表が机の上にあつて首相は姿を隱してしまつたことがわかつた。探しても何處へ行つたか

分らなかつた、現任總理大臣の行方不明といふ大事件です。さういふ譯で外相のスヘリ氏が後繼內閣を組織したのですが、又日本との斷交問題で一もめすると、そのために又內閣が倒れるといふやうなことを惹起しかねない、否、あるひはそれ以上の悲慘事さへも起りかねないと私は見てとりました。そこで外交關係斷絕を承認したやうな始末でした。從つて政府の當局者としても、イランの一般國民としても日本との斷交はまつたく不本意であつたと思ふのであります。そんな譯ですから、イラン人としては一刻も早く樞軸側がイランへ進出するのを待望んでゐます。從つて將來ドイツの軍隊がコーカサスの方を越えて來るか、或はトルコの諒解を得てその方面を通つて來るか、その時こそ全國的に、イギリスとソ聯に對する革命的の暴動が起るだらうと思ひます、その時こそイランは混亂と暴動の渦中に投ぜられ、そこから何か新しい新體制運動が、澎湃として全國的に起つて來る機運に向ふだらうと私は思ひます。又一寸話が戻りますが、何故ペルシャの國勢が古代に竝べて衰へて來たかと云ふとその一つの理由は、昔よく雨が降つたのにその後氣候の變化のために雨がふらなくなつて、沙漠のやうな荒地となつてしまつたこと、昔は直ぐ隣のイラクといふ國、これはアーリアン人の國ではなく、アラビヤ人の國で昔メソポタミヤと云つた國、アッシリア、バビロニアといふ國があつて、また有名なユーフラチス、チグリスといふ大きい河があり、その流域が豐穰の土地であつた、そこを利用して、各地に兵を出して大帝國を作つた、しかし近代に於ては土地の生產力が衰へ貧窮化して昔日の

偉がなくなつた。もう一つは、古代のペルシャは、歐亞の連絡の中心であつたのです、マルコ・ポーロの旅行記を讀みましても書いてありますが、（このマルコ・ポーロの本は改造文庫に譯されて、五十錢で賣られてゐますから、どうぞお讀みになつて戴きたいのですが）ペルシャはヨーロッパと支那の交通の中心で隊商が頻繁にここを往來した、多くの人が來れば、隨つて文物が輸入されて、都會的の典雅で優美な、惡くいへば女性的な文化國になつた、ペルシャを辯護する人は、ペルシャは例へて云へば絕世の美人のやうなものだけれども、周りに雲助のやうな强大國がゐて苛めぬくので、すつかり駄目にされてしまつたと云ふのです。たしかにそんな點がないでもない。兎に角昔は歐亞の交通路の中心にあつて、非常に榮えたのでありますが、十三世紀以後はトルコが勃興して、商人から高い稅を取上げるといふことに專念した爲に、何とかして餘り稅を取立てられないやうな地方をまはつて東洋に行きたいといふので、貿易商人達が海に依つて東洋に行く途に眼をつけ始めたのであります。その結果十五世紀の末にバスコ・ダ・ガマがアフリカの南端を廻つてインドに出たし、それからコロンブスがマルコ・ポーロに刺戟されまして、太西洋を通つて日本へ行かうとした。當時マルコ・ポーロの本を通して、日本の國は非常に富んでゐる國で、屋根が金で葺いてあつて、國民はペルシャ語を喋つてゐる、云はゞ夢の國のやうに考へまして、地球が圓いから、西へ〳〵と行けば日本へ出るだらうといつて航海して來たところ、思ひがけず發見したのがアメリカでありました。つまりコロンブスの

アメリカ發見は日本のお蔭です。兎に角マルコ・ポーロ以來日本は非常に西歐人の注意の的となり、しまひには日本の近海には全部金で出來た島があると云ふやうな說も出て、何でも明治維新前に日本へ來た外國船は、どこか日本の近海に金の島があるのぢやないかといつて、日本の周りをぐる〳〵廻つて、探したらしいのです。つまり日本は寶の島だと思はれてをつたのです。

次に又未來の話になりますけれども、それではイランにドイツが何時頃入つて來るか、と申しましても私は軍事の專門家ではないので、これから申上げることは、全く素人の戰術から申上げるので、餘り當てになりませんが、まあ責任のない豫言位に思つてお聽きになつて戴かないと困るのです。先第一に今度のドイツが春季攻勢を始める前、即ち冬季作戰中にロシヤと樞軸側の間でお互にどれだけ準備をしたかといふ話を申しますと、これは或る確實の人から聞いた語でありますけれども、ロシヤの方としては、動員し得る壯丁が先づ七百萬殘つてゐるさうであります、しかし援ソ物資が足りなかつた爲に、新なる裝備のある軍隊の編成は二十個師團しか出來なかつた、ところがそれに反して、ドイツは何といつても占領地が非常に廣くて、占領各國の勞働力をドイツに持つて來て働かしてゐるものでありますから、ドイツの壯丁は殆ど全部軍人にすることが出來るといふ譯で、新なる師團を七十個師團編成したさうです、それからイタリーが同じく新なる師團を三十個師團編成し、フインランド、ブルガリア、ハンガリー、ルーマニア等の樞軸諸國が合計三十個師團、合計約百三十個師團新な

る軍隊の編成を終つて、命令一下どこへでも進出來る狀態にあるさうです。二十對百三十個師團ですから、今度こそ春季攻勢が始つたらロシヤは滅茶苦茶にドイツにやられてしまふだらうといふ話です。ところが日本に歸つて來てみると、一般に非常にドイツの勢力を悲觀的に見てゐる人が多くて、まだ春季攻勢に出ないのは力が弱つたのではないか、食物がないのではないかといふことを心配してゐる、ところが絕對にさういふことはありません。これは杞憂にすぎない。反之イギリスはラジオで聽いて見ると、殆んど黑パンしか食つてゐない、殆んど砂糖もなければ、お茶もなければ、肉もないといふ狀態で、イギリス人はこれからなるべく黑パンと野菜でやつて行かねばならないなどとロンドンは放送してをりました。しかしその野菜さへも一部は外國から持つて來る位ですから、イギリスこそ非常に哀れな狀態で、沒落直前といふ有樣です、勿論ドイツも食物は窮屈だけれども、イギリスとは比較にならない程よろしい。ところが今日あたりの夕刊では、いよ〳〵春季攻勢に出た樣子ですから、自分の豫言の當つたことを喜んでゐますが、何故今までドイツがやらなかつたかといふと、これは氣候の關係だと思ひます、といふのは、今度歸りに中央アシアの方を通つて見ますと、夏に近いほど暑かつた。しかしシベリヤのノボシビリスクに出ると雪がふつてゐて、バイカル湖を通つたときは一尺位氷が張つてゐました。五月の半ば近くになつても、まだロシヤの大部分は冬なんだといふことを感じまして、成程春季作戰が始まらないのは無理がないと思つた、ところが漸く雪の解けたコー

カサスの方で始つたのだと思ひます。そこで、今後の見透しですか、一旦コーカサスで始つたから、そのまゝどん〳〵南方に出て來るかといふと、勿論情勢次第では、出でて來るかも知れないが、それと同時にこんな風にも考へられる。恐らく黑海の方からカスピ海のヴォルガの流域のスターリングラードから河口のアストラハンまで早く攻めて、こゝで以てコーカサスの入口を一先づ塞く、それ以上南下すると、山岳重疊で攻めるに工合が惡い、あるひはコーカサスをそのまゝ南下しないで一方トルコに對して外交上の手段で交渉し—これはフォン・パーペン大使の腕の試しどころでありますけれども、劍を取つて立つてくれないまでも、或はドイツ軍の通過を默認する位の程度にまでトルコを說得しやうとするのではないかなどゝ見る向もあります。若しさうなつて來たならば、この方面の形勢が俄然一變して來る、さうすれば獨伊の軍隊はこのブルガリアの方からトルコに入つて、一隊がこのトルコを貫けて、シリアに直行して、スエズをつく、一隊はイラックに向つて英國の地中海艦隊の爲に供給してゐるモスールやキルクックの石油を抑へる、また別の一隊は、イランに出てイランの石油地帶を占領するか爆擊する、又そこから北上すれば容易にバクーの石油が手に入るといふことになる、するとばた〳〵とあの方面は片付くのではないか、殊にそこまで進捗する前にシリア、イラク、特にパレスタイン邊りのアラビア人が所在に反英暴動を起して蜂起するに決つて居りますからイギリスとしては收拾がつかないやうな混亂に陷るだらうと思ひます、現にあの方面にゐるのは、英軍といひまして、大部分はインド人です、極く少數のイギリス人が士官としてついてゐるだけですから、もとよりこのインド人はそんな狀勢になつて來たとき、心から死を賭して英帝國を護るだけの精神があるといはでございませんし、殊に大東亞戰爭以來、うまくやれば自分の國が獨立出來るかも知れないと云ふ際、浮き足が立つてフラ〳〵してゐますし、どうにも手の著けやうもないことにならうかと思はれます。イギリスはそれを恐れて、ロシヤの捕虜になつてゐるポーランドの兵士を六萬ばかりイランへ下して來た、ところがこのポーランドの兵隊にイギリスの服を着せたけれども、靴が足りなくて、町を整列して歩かせる時に三分の一は跣足で歩いてゐる、そして勿論このポーランド兵もロシヤにゐるよりはましかもしれないと云ふ位の氣持ちでイランにやつて來た丈で、英國の爲に生命をなげうつて忠誠を盡さうなどゝ考へてゐるものはない、殆ど戰鬪意識のない連中ですから、時がきてイランの土民が蜂起して蓆旗を立てるといつたやうな場合には、あまり頼りにはならないだらうと思ひます。寧ろ將來ドイツ軍が、今いつたやうな方法でイランの方に迫つて來たならば、案外あの邊は早く片付いてしまふのではないかと思ふ。

これから申上げることは或は幾分荒唐無稽の夢のやうな作戰かと思ひますが、そのお積りでおきゝとりを願ひます。數年前參謀本部のロシヤ班の土井大佐と御一緒にフインランドにをりましたとき、よく私が作戰の話をすると、君の作戰はなんだか詩人の作戰みたいだな、考へは非常によいが、どう

も少し足が地についてをらんぞ、しかし考へは中々面白いといふことを言つて戴いたこともありますけれども。私の作戰はさういつたやうな程度の作戰ですから、あまり當にならないかもしれません。それにも係らずなぜこれをいふかといふとかう云ふ譯です。昔アレキサンダー大王がイランを通つてインドのパンジャブまで征服した。その次にナポレオンが英國と戰つた時に、英國と戰ふにはどうしてもインドをやつつけなければならないと思つて、そのためにはイランを味方としなければならないと考へ、これをフランスの味方につける爲に盛んに文化宣傳を行つた。フランス語とフランス文學を宣傳をやつた、また偉い學者を派遣したり藝術家を派遣して、フランスは偉い、フランスの藝術は素晴らしいといふことを盛んに宣傳した。結局フランスの文化宣傳は效を奏し、今に至るまで一般にフランス文化が非常に尊敬されてをります。恐らくヒットラー總統も、イギリスと戰ふ以上、アレキサンダー大王、ナポレオンについて印度のことを考へてゐるだらうと想像されるのであります。さうなりますと日獨兩軍の握手は印度またはイランでといふやうなことになるかもしれません。但し今イランでは食糧暴動をやる位の食糧缺乏の狀態ですから、あそこへ何十萬といふ兵隊を連れて來るといふことは、ちよつとこれは中々事實上の困難があるのではないかと思はれます。少くとも漫然とそこに滯在してをるといふことはなか〳〵困難である。さうなると私は却てテヘランからイランの東部メシエッドの方に進出して、そこから北上してロシヤの中央アジヤの方に出て來る可能性もあるのではないかと思ふ。これこそ詩人の作戰ですけれども、絶對に考へられないことはないと思ふのです、さうするとこゝ等邊はイランよりも食物がありますし、物資もより豊かですから、この方面を抑へると、ロシヤは丁度自分の背後の方に敵が廻つたやうになつて、相當あはてるのではないか、或はクイブイシブあたりを撤退してもつとシベリヤの東の方に都を移して、ロシヤの土崩瓦解を惹起するやうなことになつて來るのではないかなどゝ空想されるのであります。殊に私共は歸りに中央アジヤを通つて、この方面をよく見て參りましたが、今までこの方面は私は只の沙漠地帶だと思つてゐたところが、中々大きな綠地があつて、千里の沃野と申しますか、棉花羊毛は勿論のこと、ある本に依りますと小麥なども大變出來ると書いてあります、到る處耕してあり、川も流れてをりますし、運河も出來てをりまして、將來これは第二のウクライナといつてよい寶庫ぢやないかと思ふ、殊にタシケントといふ人口七十萬の都會がありまして、こゝから新疆省の方に出る自動車道路がある。その他にも三ケ所同じやうな自動車道路があることが明かであります。新疆省の後には儼然としてロシヤが控へてをつて、非常に富裕な土地を持ち、鐵道までも敷いて、四ッほど新疆に出る自動車道路を持つてをりますから、日本としては將來この方面のことをよく研究しておかなければならないといふことを感じて歸つて參りました、向ふの方から見ればそれはアジヤに對する前進基地であると共に又これは逆にいふならば、ロシヤにとつては國防上の最弱點になる危險もある、現に包頭から新疆の國境の方へ自

動車路が出來てをりますけれども、將來この方面に今日本で計畫してをります中央アジヤ鐵道がせめて新疆省の入口まで出來るやうなことにでもなれば、あの邊の事情も又一變してくるのではないか。鐵道は第二としても先づ飛行路が開設されゝば、日本の勢力が新疆省を越えてアフガン、イランの方に出るやうになる、イランまで東京から三日で行ける、テヘランから三十時間でベルリンに行ける、殆ど五日以内に東京からヨーロッパの中心に行けるやうになるのではないかと思ひます。して見るとイランあたりは日本から遠い國ではない、こゝは最も重大な歐亞連絡の交通の要路になつて、昔海の航路が開かれて衰微した古代からの陸の交通路が再び世界の表面に歐亞交通の中心として浮び上つて來るといふ時代が必ず近き將來に來るのではないかと思はれます。そればかりではない。只今は大東亞戰爭以來人々の注意はやゝもすれば南方にのみ集中され勝ちでありますが、我々はもつともつと雄大なる世界政策的眼光をもつて北方の問題も考へなければなりません。一九三二年、滿洲事變直後アメリカの外交雜誌「フオレイン・アフエヤーズ」といふ本の中でチベットの英國公使を三十年以上もしてゐたサー・チャールズ・ベルといふ人の論文をよみました。その中で彼は將來チベットを支配する國はイギリスかロシヤか支那か日本の中の一つだ、或は日本かも知れないといふことを書いてゐる、ところが知らぬは亭主ばかりなりで、日本人自身はまさかチベットに近い將來日本の勢力が及ぶことがあらうとは想像する者は殆んどない。サー・チャールズ・ベルの書いた本「チベット・バスト

アンド・プレゼント」「チベットの過去及び現在）が日本語に譯されてをります、これを讀みますとやはり「チベットと日本」といふ一章がありまして、全チベットの若い青年が如何に日本にあこがれてゐるかといふことをハッキリ書いてをる、このサー・チャールズ・ベルは滿洲事變が始まりましてから二度も滿洲の視察に來てゐる、何の爲に來てゐるかといふと、全チベットの青年が日本最負で、日本の指導の下に立上りたいといふ空氣が瀰漫してをるから、何とかして滿洲がうまく行つてをらないことは、私がこの目で見てから明瞭であるといふことを言ひたいためであつた。しかし、いくらこんなデマ宣傳をやつても、チベットの方ではラマ僧の巡禮が內蒙古の方と頻繁に往き來してゐるものですから、盛んに正しい日本や滿洲に關する情報が口から口へ傳へられてチベットに入つて來る、それでイギリスの方では非常に驚いて、二、三の非常に優秀な青年をロンドンへ連れて行つて、ヂャーナリズムの課程を終へさせて、チベットで新聞を出さしてをります、この新聞で日本はなつてをらぬ、賴る所は英國だ、英國が一番偉いといふことを書かせてゐる、ところがラマ僧の巡禮の情報を通して、あゝいつてをるけれども、あれは皆嘘だといふことが皆チベットの青年に分つてゐる、その上チベットから出て來た支那のラマ僧の言葉に依ると、雜貨などは殆ど完全に日本のものださうです、どこからさういふ物が入つて行くかといふと、カルカッタから入つて行く、一九二七年に私はアメリカのシカゴで働いてをりましたが、そこの大學の先生でウキリアム・マックガバンといふ人が「ラサ

譯潛行記」とでもすべき本を書いてをります。この人は大乘佛教を研究してをりまして、英語で大乘佛教の本を書いてをります、中々偉い方で、日本に十三年をつて、日本語は二時間位話してもてにをは一つ間違へない、客間には漢譯の大藏經が並んでをつて、サンスクリットもパリー語も西藏語も皆讀める、坊さんに變裝してラッサに行つて長く同地に滯在してゐたことがあります。私がアメリカへ行つたのが一九二七年、その時既に、その本があつたのですから、それ以前に發行した本です、さうして見ると餘程古い時の話ですが、その本の中に如何にカルカッタとラッサとの關係が密接であるかといふことが書いてある、自動車が自由に往來出來る、直通の電話がある、恐らく今は無線電信もあるだらうし、或は殆どラヂオなんかもあるのではないかと思ひます。さういふやうな譯ですから、金もインドのルピーを使つてをりまして、イギリスが事實上あそこを抑へてゐると見てよい、併しそれではなぜイギリスがチベットにそんなに力を入れるかといふと、產業的に見て色々な鑛物資源もあるし、殊にオーストラリヤに較べると質が惡いけれども、羊毛が非常に出るといふこともあります、けれどもそれよりも寧ろ私はチベットを通して、例へばロシヤが新疆の方から絕えず支那本部の方への勢力伸長を狙つてゐるやうに、イギリスは、太平洋に面した領地や植民地を皆奪はれても、若しもチベットさへ抑へてゐるならばチベットを通して又再び支那の本土に出て來ることが出來る。チベットがある限り內部から支那全土を崩壞させることも出來る、支那を完全にコントロールすることも出來るので、チベットを支那問題の爲にイギリスが抑へてゐるものと考ふるべきであると思ふ。隨つて吾々は東洋の永遠の平和といふことを考へれば、チベットを拔きにして支那問題を考へることは非常な片手落だと思ふ、これ以上あまり委しく立入つたことを申上げるのは愼しまなければならないと思ひますが、將來若しも一度日本の勢力がカルカッタに及んだならば、その途端に全チベットは進んで日本の勢力の下に入つてしまふだらうと思ふ。なぜならばチベット人には日本を指導國家として仰ぎたいといふ氣持があるからです。私はこの際少くともチベット問題を皆さんの御考慮の中に入れて置いて頂きたいと思つてをります。

それから最後に、さき程申上げました飛行路の話ですが、若しもアフガニスタンに入るとき越す山脈が高過ぎて餘程大きな飛行機でなければ工合が惡いといつた場合には、チベットの北側を通過して行く航路も考へ得るといふことです。して見るとチベットの問題は將來の飛行連絡路の點からいつても、もう少し日本人が一般にもつと今まで以上の注意を拂ふ必要があるのではないかと思ふのであります、非常に纏まらない話でございましたけれども、私のお話は大體この位にしまして、何か御質問がありましたらお答へ致したいと思ひます。（拍手）

本會報告

○理事會

七月二日、九月三日、十月三日本會事務所に於て開會通常會務に付協議せり

○講演會

七月二日　イランより歸りて

元イラン國駐劄特命全權公使　市河彦太郎君

十月十四日　最近の米國事情

東東日日新聞社副主筆　楠山義太郎君

右は何れも當日午後四時半より永樂倶樂部に於て開催時局柄極めて有益なる講演を聽取せしが來會者毎會二百餘名に達し頗る盛大なりき。

社團法人　大日本國防義會定款

（大正十三年八月十三日法人設立認可）

第一章　總則

第一條　本會ハ國防ニ關スル諸般ノ事項ヲ調査研究シ其智識思想ノ普及涵養ヲ計ルヲ以テ目的トス

第二條　本會ハ社團法人大日本國防義會ト稱ス

第三條　本會ハ事務所ヲ東京市麹町區大手町二丁目二番地ニ置キ支部又ハ出張所ヲ必要ノ地方ニ設ク

第四條　本會ハ前條ノ目的ヲ達成スルタメ左ノ事業ヲ行フ

一、講演會、討論會ヲ開クコト

二、調査部、研究部其他必要ナル機關ヲ設クルコト

三、關係當局ニ建議スルコト

四、會報若ハ圖書ヲ刊行頒布スルコト

五、前各號ノ外本會ノ目的ヲ達成スル爲必要ナル事業

第二章　會員

第五條　本會々員ヲ分テ通常會員特別會員及名譽會員ノ三種トシ左ノ區別ニ從フ

一、通常會員ハ本會ノ維持ニ任シ毎年金六圓以上又ハ一時金百圓以上ヲ醵出スルモノ

二、特別會員ハ本會ニ特種關係アルモノ又ハ本會ノ事業ヲ補助スルモノニシテ理事會ノ決議ヲ以テ推薦スルモノ

三、名譽會員ハ本會ノ趣旨ヲ贊成スルモノニシテ其地位聲望本會ヲ稗益スヘシト認ムルモノ及本會ニ特別ノ功勞アルモノニ就キ評議員會ノ決議ヲ以テ推薦スルモノ

第六條　本會々員タラントスルモノハ會員二名以上ノ紹介ニ依リ前條第一號ノ醵出金額ヲ定メ書面ヲ以テ入會ノ申込ヲ爲シ本會ノ承認ヲ受クルコトヲ要ス

第七條　本會ヲ退會セントスルモノハ書面ヲ以テ其旨屆出ツヘシ但既納ノ會費ハ之ヲ返還セス

第八條　本會々員ニシテ左記各號ノ一ニ該當スルモノハ評議員會ノ決議ヲ以テ之ヲ除名スルコトアルヘシ

一、本會ノ名譽ヲ毀損シ若ハ本會ニ對シ不利益ナル行爲アリト認メタルトキ

二、本會ノ定款其他ノ會則ニ違背セル行爲アリタル時

會費ノ怠納六箇月以上ニ及フモノハ前條ノ規定ニ拘ラス直ニ會員タル資格ヲ喪失スルモノトス

第三章　役員及職員

第十條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一、會長　一名

二、理事　三十名以内

三、監事　五名以内

四、評議員　若干名

第十一條　會長ハ理事中ヨリ理事及監事ハ評議員中ヨリ各互選ヲ

以テ之ヲ選擧シ評議員ハ會員總會ニ於テ會員中ヨリ之ヲ選擧ス

第十二條　役員ノ任期ハ三年トス但重任ヲ妨ケス

役員ノ任期カ其任期中ノ最終年度ノ定時會員總會ノ終結前ニ滿了スルトキハ其定時會員總會ノ終結ニ至ル迄之ヲ延長ス

役員ニ缺員ヲ生シタルトキハ特ニ補缺ノ必要ナキ限リ次ノ改選期迄之ヲ延長スルコトヲ得

第十三條　補缺員ノ任期ハ其前任者ノ殘任期間トス

會長ハ本會ヲ代表シテ會務一切ヲ統理シ會員總會評議員會及理事會ヲ招集シ各其議長ニ任ス但會長事故アルトキハ理事之ヲ代理ス

理事ハ會務ヲ掌理ス會長ハ理事中ニ就キ常任理事若干名ヲ指名ス

第十四條　監事ハ本會會計及會務ヲ監査ス

評議員會ハ評議員ヲ以テ之ヲ組織シ會長ノ諮問ニ應シ會員總會ニ附議スヘキ事項其他重要事項ヲ決議ス

評議員會ハ會長ニ於テ必要ト認メタルトキ若ハ評議員十分ノ一以上ノ請求アルトキ之ヲ招集ス

評議員會ハ評議員總數ノ十分ノ二以上出席スルニアラサレハ議事ヲ開クコトヲ得ス評議員會ノ議事ハ出席員ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル但總會ニ提出スヘキ定款變更案ノ決議ハ

出席員ノ三分ノ二以上ノ同意アルニアラサレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第十五條　會長ハ理事會ノ決議ニヨリ名譽顧問及相談役ヲ推薦シ又ハ參與委員ヲ囑託スルコトヲ得

名譽顧問及相談役ハ會務ノ執行ニ關シ會長ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ理事會ニ出席スルコトヲ得

參與委員ハ會長ノ區署ニ從ヒ會務ニ參贊ス

第十六條　本會ニ左ノ職員ヲ置キ會長之ヲ任免ス

一、幹事　若干名

二、書記　若干名

第十七條　幹事ハ會長及常任理事ノ命ヲ受ケ會務ヲ處理シ書記ハ幹事ノ指揮ニ從ヒ會務ニ服ス

第四章　會員總會

第十八條　定時會員總會ハ毎年一回之ヲ東京市ニ招集シ事務及會計ノ報告ヲ爲シ及重要ナル事項ヲ決議ス

臨時會員總會ハ會長ニ於テ必要ト認メタル場合及會員三分ノ一以上ノ請求アリタル場合ニ之ヲ招集ス

第十九條　會員總會ハ少クトモ開會五日前ニ附議事項及日時場所ヲ具シタル通知狀ヲ發シテ之ヲ招集スヘシ

第二十條　總會ノ議事ハ出席會員ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル但定款變更ノ決議ハ出席會員ノ三分ノ二以上ノ同意アルニアラサレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第五章　資産

第廿一條　本會ノ資産ハ基本金、會員ノ醵出金、寄附金及其他ノ收入ヨリ成立ス

第廿二條　本會ノ基本金ハ指定寄附金又ハ理事ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム但設立當初ニ於テハ大日本國防義會ヨリ繼承シタル資産ノ内金壹萬圓ヲ下ラサル金額ヲ定メテ基本金トナス

第廿三條　本社團資産ノ管理使用及處分ハ設立者及理事ノ決議ニ據ル

第廿四條　本社團解散ノ場合アル時ハ本會ノ資産ハ主務官廳ノ許可ヲ得テ設立者及理事ノ決議ヲ以テ之ヲ處分ス

第廿五條　本會ノ經費ハ基本金ノ利子、會員ノ醵出金、寄附金其他ノ收入ヲ以テ之ニ充ツ

第廿六條　本會ノ會計年度ハ毎年一月一日ニ始マリ十二月三十一日ニ終ル

附則

第廿七條　大日本國防義會規約ニ據ル會員及名譽顧問ハ本定款ニヨル會員及名譽顧問トス

第廿八條　本社團設立ノ際ニ於ケル會長ハ大日本國防義會現任會長之ニ當ル

第廿九條　大日本國防義會ノ資産ハ本社團ニ繼承スルモノトス

第三十條　本會事務施行ノ爲必要ナル細則ハ別ニ之ヲ定ム

名譽顧問

岡田啓介　有馬良橘　男爵荒木貞夫

松井石根　阿部信行　堀啓次郎

南條金雄

役員

會長　山田英太郎

常任理事　長谷川直敏　八角三郎　吉田秀人

理事　山田英太郎　長谷川直敏　八角三郎

吉田秀人　淡中孝八郎　中野金次郎

亀岡豊二　相馬半治　岩崎清七

篤正太郎　渡邊金三　宮原國雄

鈴木忠治　新井章治　神林虎雄

松本新太　近藤利兵衛　穴水熊雄

北川與平　白石勝彦　宮治民三郎

尾崎三雄　匠瑛胤次　高木義賢

加藤鋼一

監事

箱石朝政　岡崎慶次郎

評議員

石塚英藏　岩崎清七　石本祥吉
井上源之丞　今井信平　原嘉道
橋本圭三郎　箱石朝政　長谷川直敏
早川德次　服部寅雄　馬場鎮江
西野元　東郷昌武　硎次一郎
子爵大河内正敏　大倉和親　侯爵大隈信常
大林義雄　男爵大藏公望　大橋新太郎
岡崎慶次郎　荻野貫右　大塚勇太郎
大橋誠一　小野寺文哉　大川鐵雄
岡村正善　尾崎三雄　渡邊三郎
渡邊金三　渡邊省二　渡邊善十郎
川崎八右衛門　神林虎雄　伯爵樺山愛輔
加藤鎮一　亀岡豐二　筧正太郎
加藤鎌五郎　川原林順治郎　鹿取龍造
金森清之助　加野吉次郎　吉田秀人
米山梅吉　吉岡幸雄　横山勝事
渋中孝八郎　高木陸郎　田中穂積
田中重衛　高廣三郎　高木謙吉
田幡鐵太郎　高橋謙三　高木義賢
子爵曾我祐邦　相馬半治　匝瑳胤次
筑紫熊七　鶴田久作　堤康次郎
土屋半治　内藤久寛　中野金次郎
中野茂一郎　永田銀太郎　南郷次郎
内藤多仲　中柴末純　村上濱吉
伯爵上杉憲章　上田恭輔　内海清助
宇佐川知義　宇田惣吉　宇佐美辰五郎
久原房之助　黒田秀博　山田英太郎
山下亀三郎　矢野恒太　八角三郎
栗田鈔次郎　山田俊夫　山形章
山下恒雄　山口亀藏　増田義一
松永義雄　伯爵松平頼壽　牧野元次郎
松田茂幸　松本新太　前橋俊一
増田正雄　藤田益弘　綱田耕治郎
公爵近衛文麿　小池厚之助　近藤乾郎
近藤利兵衛　小山谷藏　遠藤高之丞
手塚弘平　青樹重康　新井章治
東重清　荒木十畝　穴水熊雄
齋藤藤夫　崎山刀太郎　北川與平
木本鐵雄　湯村文記　宮原國雄
宮治民三郎　三橋金太郎　白石元治郎
公爵島津忠重　清水釘吉　下村鹿次郎
四王天延孝　芝原寅之祐　白石勝彦
白川順一　土方久徵　平山午介

日向源之助　平田讓衛　森盛一郎
森山慶三郎　森傳　百瀨唯一
關谷和三郎　鈴木忠治　末高信

参與委員

遠藤高之丞

幹事

福田辨治郎

昭和十七年十一月十五日印刷
昭和十七年十一月二十日發行

東京市澁谷區代々木山谷町三百十番地
編輯兼發行人　福田辨治郎
東京市京橋區越前堀二丁目廿四番地
印刷人（東東五一二）渡邊一平
東京市京橋區越前堀二丁目廿四番地
印刷所　玉友社印刷所
東京市麴町區大手町二丁目二番地
發行所　社團法人　大日本國防義會
電話丸ノ内（23）六六〇一番

420
481

終